

聖霊によって宣教せよ

「使徒の働き」の学び

質問式聖書の学びシリーズ 2

(教師用ガイド)

目次

この本の使い方

- 1 章 約束を待ちなさい (使徒 1 章)
- 2 章 御霊に満たされなさい (使徒 2 章)
- 3 章 イエスの御名によって歩きなさい (使徒 3 章)
- 4 章 迫害されるとき大胆になりなさい (使徒 4 章)
- 5 章 神だけを恐れなさい (使徒 5 章)
- 6 章 聖霊の方法に従いなさい (使徒 6 章)
- 7 章 イエスのために人生をささげなさい (使徒 7 章)
- 8 章 聖霊の導きを受けなさい (使徒 8 章)
- 9 章 主の選びの器 (使徒 9 章)
- 10 章 彼らを受け入れなさい (使徒 10 章)
- 11 章 関係を築きなさい (使徒 11 章)
- 12 章 教会の逆転勝利 (使徒 12 章)
- 13 章 聖霊によって宣教しなさい (使徒 13 章)
- 14 章 あなたを通して神がなされる (使徒 14 章)
- 15 章 あの人たちもそうなのです (使徒 15 章)
- 16 章 牢獄の中で賛美しなさい (使徒 16 章)
- 17 章 神を知らない人たちに宣べ伝えなさい (使徒 17 章)
- 18 章 同労者と共に働きなさい (使徒 18 章)
- 19 章 周りに影響を与えなさい (使徒 19 章)
- 20 章 あなたの任務を果たし終えなさい (使徒 20 章)
- 21 章 正しくても誤解される (使徒 21 章)
- 22 章 人生体験を証ししなさい (使徒 22 章)
- 23 章 神の計画があるから (使徒 23 章)
- 24 章 信仰を妨害するもの (使徒 24 章)
- 25 章 私のようになることを願う (使徒 25, 26 章)
- 26 章 嵐の中で宣言しなさい (使徒 27 章)
- 27 章 今いる所で宣教しなさい (使徒 28 章)
- 28 章 あなたによる使徒 29 章

この本の使い方

この本は、イエス・キリストを信じて受け入れた人が、教えて導いてくれる人と一緒に聖書を学ぶために作られました。もちろん、未信者の人や、信じて何年にもなるけどクリスチャン生活についてもう一度学びたい人のためにも、使うことができます。1対1で学んだり、家庭集会や小グループで学んだりするときにも使うことができます。学ぶ人は、この本の「書き込み用教材」と聖書（この教材では、「新改訳2017」を引用しています）、そして筆記用具を準備して下さい。学んだことや感じたことを、その場ですぐに書き込んでおくと、後で読み返したときに、よく思い出すことができます。

導く人は、まずこの本の「教師用ガイド」を持って、その日に学ぶ章のタイトルと聖書箇所を言います。そしてその箇所（例えば、1章であれば、使徒の働き1章全部）を、参加者全員で声を出して読みます。1節ずつ輪読したり、導く人と参加者が1節ずつ交読したりしても良いです。これは、聖書の物語全体の流れを把握するために必要なもので、読む量が長くて大変でも、省略しないようにして下さい。その後、導く人は質問を読み、その下書いてある聖書箇所を、誰か1人に読んでもらうように指名します。その人が読んだ後、導く人は再び質問をその読んで、誰かにその答えを言ってもらいます。いつも同じ人ばかりが答えるのではなく、「他の人はどうですか？」と言って、みんなに発言を促して下さい。導く人はあまり話しすぎないで、参加者みんなが積極的に答えて、自由に話し合いができるような雰囲気を作して下さい。話しがまとまってきた後で、導く人は、教師用ガイドの「解説」の所を読みます。もちろん、これは参考なので、導く人が短く自由にまとめても良いです。その後、次の質問に移ります。各章の最後の質問は「まとめと適用」の質問です。参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。そして、祈りを持って学びを終えます。

この本は、学ぶ人が自分で聖書の中から答えを見つけることができるように作られています。自分から聖書を開いて「みことばは何と言っているか」を探す習慣がつくと、それが神の御声を聞く訓練になります。みことばを読んでその意味をよく考えて、それを自分の実際の生活に適用し、みことばを実践していくとき、その人は霊的に成長していきます。自分自身で見つけた答えというのは、後になっても忘れません。また、他の参加者の答えを聞くときに、以前から知っていた聖書箇所も新しく感じるものです。

導く人は、この本を使って、他のクリスチャンの霊的成長を助けることができます。質問はそれほど難しくなく、その聖書箇所をよく読んで考えれば、誰でも簡単に答えられます。なので、聖書知識をたくさん持っていない人でもすぐに導くことができます。そして、導く人は、自分自身が一番学び、成長できます。みことばを教えることによって、他のクリスチャンの成長のために仕える喜びを体験するようになります。この本を使う人がみな、神のみことばによって共に成長していく祝福を味わいますように、主の御名によって祈ります。

2019年5月28日 伊藤 仁

1 章 約束を待ちなさい (使徒 1 章)

まず、新約聖書の 5 番目の書、使徒の働き 1 章全部 (1 節から 26 節まで) を、声を出して読んでみましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、イエスは使徒たちに、どんな約束を待つように命じましたか？

(使徒の働き 1 章 4 節と 5 節を読んで下さい。その中に答えがあります。)

(解説) 父の約束、つまり、聖霊によるバプテスマを受けるという約束を待つように、そしてそのためにエルサレムから離れないでいるように命じました。それも「間もなく」受けると言われました。何事でも、待つことが大切です。信仰とは、約束を待ち望むことです。でも、この「待つ」ということが意外と難しいのです。特に若者は、じっとしていることができません。待つよりも、動き出したいのです。しかし、時には神は、時間をかけてみわざをなされます。私たちをたくさん待たせて、信仰をテストするためです。待つことを通して、私たちの信仰は訓練され、成長させられるのです。

2、使徒たちはイエスに何を望みましたか？

(使徒 1:6)

(イザヤ 55:8, 9) わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。一主のことば一天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

(解説) 使徒たちは、イエスが「イスラエルのために国を再興して」くれることを望んでいました。彼らの願いは、目に見える政治的な国の独立でした。彼らは、自分の計画が、自分の方法で実現することを望んでいました。しかし、神の計画、神の方法は違いました。神の思いは、私たちの思いよりもっと、ずっと高いのです。そして神の計画は、いつも完全で、最善です。あなたが考えもしなかったような、あなたの想像をはるかに超えた、すばらしい最高の神の計画が、あなたを待っています。だから、自分の今の計画を主にゆだねて、神の計画を受け入れて下さい。後でこう告白する 때가きっと来ます。「やっぱり、今のこっちの道のほうが、以前自分が考えたあの道よりも、ずっと良かったですね、主よ。」

3、「いつとか、どんな時とかということ」を、私たちは知らなければなりませんか？

(使 1:7)

(伝道者 3:11) 神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

(解説) いつとか、どんな時とかということは、私たちは知らなくても良いと、イエスは言われました。なぜなら、それは父なる神がご自分の権威をもって定めておられるからです。だから私たちは「いつそれが実現するのか？」ということ、知る必要もないし、知ろうと努力しなくても良いのです。「一体いつになったら……」と心配してはいけません。それは、私たちのする仕事ではありません。いつかを決めるのは、神の仕事です。私たちは、そのときが来るのを、信仰によって待ち望むのです。私たちの時計と、神の時計は違います。神だけが最善の時をご存知です。それは遅くもなく、早くもありません。神のなさることは、すべて時にかなって美しいのです。「主の時」が来たら、はっきりと門が開きます。

4、聖霊は何のために臨みますか？

(使 1:8) しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。

(解説) それは、私たちが力を受けて、主イエスの証人となるためです。これが、聖霊が臨まれる目的です。私たちは、何のために聖霊の力を求めますか？自分の成功のため？自分の問題から脱出するため？他の人に見せるため？奇跡を行うため？健康のため？仕事のため？家族のため？進路のため？お金のため？……いいえ、自分の肉の欲望のために、聖霊を求めてはいけません。もし自分の目的のためだったら、自分の力でやって下さい、しかし主の目的のためなら、主がその力を与えて下さいます。聖霊の力が欲しいですか？それなら、まず主イエスの証人となって下さい。「宣教のために人生をささげます」と決心して下さい。そのとき、あなたには上からの力が注がれます。

5、御使いたちは、何を約束しましたか？

(使 1:11)

(解説) 主イエスが、見たのと同じ有様で、再びこの地に来られることを約束しました。この再臨の約束こそ、私たちの希望であり、私たちの究極的なビジョンです。その日には、王の王、主の主であるイエス様が、この世界を完全に支配します。サタンは敗北して、全ての災い、のろい、悲しみ、痛みはなくなります。その日には、クリスチャンは主と共に王となり、この地を治めるのです。これが「神の御国のビジョン」です。これこそが私たちの宣教の最終目的です。この最終ビジョンがわかれば、私たちはそれに向けて今、何をすべきかわかります。あなたのビジョンは何ですか？あなたのビジョンがもし地上での成功だけだったら、困難にぶつかったときに、途中で挫折してしまうでしょう。しかし、この御国のビジョンをつかんだ人は、今地上でどんなに困難や迫害があっても、それに耐えることができます。最後まであきらめずに、約束実現の希望を持ち続けて、最後には必ず勝利するのです。

6、使徒たちは、約束をどのように待ち望みましたか？

(使 1:14)

(解説)「いつも心を一つにして、祈って」いました。約束とは、何もしないでばーっと待っていて、放っておけば、後は神が勝手に実現して下さるものでしょうか？ いいえ、そうではありません。約束は、何もしないでいては実現しません。私たちの側でもすべきことがあるのです。では、何をするのですか？それは、祈ることです。そして主の時が来たら、動き出すのです。どのように祈るのでしょうか？一人一人バラバラで、各自で祈りましたか？1回だけ祈りましたか？ いいえ、みんなで集まって、一つになって、熱心に、ずっと祈り続けました！メンバーみんなが1つのビジョンを持って、心を合わせて熱く祈り続けたときに、聖霊が注がれたのです。これが正しい信仰のスタイルです。信仰とは、祈って、動いて、勝ち取るものなのです。

7、約束を実現させるために、彼らは何を準備しましたか？

(使 1:21, 22)

(解説) 主イエスが使徒たちと一緒に生活しておられた間、いつも行動を共にした人、つまり、忠実な弟子の中のひとりを選んで、彼に使徒職の地位を継がせました。初代教会は、宣教のビジョンを実現するために、まず「人」を準備したのです。それも、3年間途中でやめなかった、忠実な弟子を、リーダーに立てました。私たちの教会は、宣教のために何を準備しますか？お金？土地？会堂？学校？イベント？伝道集会プログラム？……「人は方法を探すか、神は人を探す」のです。神の道具は「人」です。神は一人の人の用いて、リバイバルを起こすことができます。多くの群衆はいりません。一人の忠実な弟子さえいればいいのです。神は準備された器に水を注いで下さいます。もしあなたの教会に、人がいっぱい押し寄せてきたら、誰が彼らを導きますか？そのときに備えて、あなたはこれから準備しなければなりません。あなたが彼らを育てるようになるのです。あなたが自分自身の器を準備するなら、神はあなたを用いて、多くのたましいを救いに導いて下さるでしょう。あなたは今、そのための準備ができていますか？

8、神の約束を実現させるために、あなたはどのようにしたら良いですか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

(例) 神の約束を実現させるために、私は……

- (1) 信仰をもって待ち望む。
- (2) 自分の計画をゆだねる。
- (3) いつ実現するかを心配しない。
- (4) 神の宣教目的のために人生をささげる。
- (5) 再臨と御国完成のビジョンを最終ゴールに設定する。
- (6) メンバーとビジョンを共有して、共に集まって祈り続ける。
- (7) 自分自身を主の忠実な弟子として準備する。

2 章 御霊に満たされなさい (使徒 2 章)

まず、使徒の働き の 2 章全部を読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、 彼らは聖霊に満たされたとき、何を語りましたか？

(使 2:4)

(使 2:11)

(解説) 聖霊に満たされた彼らは、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めました。彼らは、色々な民族のことばで「神の大きなみわざ」を語ったのです。聖霊に満たされた人は必ず、神の大きなみわざを語る人、つまり主の証人となります。聖霊に満たされたのに、主を証ししない、ということはありません。聖霊に満たされると、その臨在と喜びがあふれて、もはや証しせずに黙っていることができなくなるのです。これが、聖霊に満たされたかどうか分かる一番のしるしです。

2、 誰が聖霊を受けることができますか？

(使 2:17)

(使 2:39)

(ローマ 8:9) しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉のうちにではなく、御霊のうちにいるのです。もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。

(解説) 旧約時代には、聖霊は、預言者や指導者など、特別な人にだけ注がれました。しかし今の時代には、「すべての人にわたしの霊を注ぐ」と約束されています。この「信じる時聖霊を受ける」という約束は、使徒たちだけでなく「あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すなわち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられている」のです。イエス・キリストを信じて心に受け入れた全ての人は、「キリストの御霊」を持ち、キリストのものとされ、キリストが心に内住しているのです。聖霊は、ある一部のクリスチャンだけ、何かえらい人だけ、牧師先生だけ、人格的にすぐれた人だけ、大人だけ、ある民族だけ、ある教団教派グループだけに注がれるものではありません。普通の人にも、信徒にも、信じたばかりの人にも、子どもにも、どの部族でも、どの教会でも、主イエスを信じる「全ての」人に与えられるのです。

3、 聖霊に満たされるためには、どうしたらよいのでしょうか？

(使 2:37-39)

(エペソ 5:18) 御霊に満たされなさい。

(Ⅰヨハネ 5:14, 15) 何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。私たちの願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。

(解説) 全てのイエス・キリストを信じた人は、聖霊を持っています。しかし、中にはこのように思う人がいるかもしれません。「私はイエス様を信じたのに、どうして聖霊を感じないのか？」それは、聖霊が内住していても、聖霊に満たされ、聖霊に支配され、力を受けていないからです。私たちは聖霊を持つだけではなくて、聖霊でいっぱい満たされなくてはなりません。では、聖霊に満たされるには、どうしたらよいのでしょうか？ペテロの説教を聞いた人々も心を刺されて「私たちはどうしたらよいのでしょうか？」と言いました。ペテロはまず「悔い改めなさい」と言いました。まず第一にすべきことは、悔い改めて、罪から分離することです。そして第二には「バプテスマを受けなさい」と命令しました。バプテスマは、主への献身の決意表明です。「キリストのために私の人生の全てをささげます」と決心して下さい。そうすれば、「賜物として聖霊を受ける」のです。「御霊に満たされなさい」というのは、単なるおすすめではなく、必ず従うべき神の「命令」です。聖霊に満たされなくてもよいクリスチャンなんて一人もいません。神の命令であるなら、それが神の御心である、ということです。「御心に従って願うなら神は聞いて下さる」と聖書に「約束」されています。だから、だから「私を聖霊に満たして下さい」という祈りは、御心にかなっており、その願いは必ずかなえられる、ということです。私たちは日常生活の中で「私をいつも聖霊に満たして下さい」と祈って慕い求めましょう。そして、神のみことばの命令と約束に基づいて、信仰によって「私はもう聖霊に満たされた」と宣言しましょう。そうするとき、あなたは聖霊によって支配され、力を受け、生活が変えられていきます。

4、聖霊に満たされると、私たちの生活はどのようにになりますか？

(使 2:42)

(使 2:46, 47)

(ガラテヤ 5:22, 23) しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

(解説) 聖霊に満たされた弟子たちは、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしました。そして毎日、心を一つにして集まり、喜びと真心をもって食事を共にし、神を賛美しました。なので、民全体から好意を持たれて、毎日救われる人々が仲間に加えられたのです。何てすばらしいことでしょう！これが聖霊に満たされた生活です。聖霊に満たされ続けるとき、私たちは生活の中に「御霊の実」が結ばれて来るようになります。「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」といった品性が現れて、キリストに似た者へと変えられていくのです。キリストの品性が生活の中で現れていくとき、それは自然と周りの人々に良い影響を与えます。あなたの変えられた品性そのものが好意を持たれて、証しとなるのです。そしてその影響は、波紋のように広がっていきます。あなたが聖霊に満たされるとき、あなたを通して、あなたの家族、親戚、友達、近所の人々、クラスメイト、職場の同僚が変えられ

ます。信じますか？……聖霊があなたを用いて、救われる人々を次々と仲間に加えて下さいますように、お祈りします。

5、あなたは聖霊に満たされるために、今どのようにしたら良いでしょうか？

(解説) 賛美と祈りの中で、みんなで一緒に聖霊の満たしを求めて祈りましょう。

- (1) 今までの罪を告白して悔い改めて、その罪から分離すると決心して下さい。
- (2) 自分の人生の全ての分野を主にささげて、明け渡して下さい。
- (3) 信仰によって「聖霊に満たされた」と自分自身に宣言して下さい。
- (4) 御霊の実が結ばれて、キリストに似た者へと変えられるように祈って下さい。
- (5) 自分の周りの人々の救いのために祈り「私を主の証人として下さい」と祈りましょう。

3章 イエスの御名によって歩きなさい (使徒3章)

まず、使徒の働き3章全部を読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、その生まれつき足の不自由な人は、何を求めましたか？

(使3:2-5)

(解説) 彼は「施し」つまりお金を求めていました。それも、たくさんではなく、少しだけでもいいから「何かもらえと思って」求めました。それで「私をあわれんで、お恵みを・・・」と言ったのです。しかし、彼の問題は、お金を得ることで解決できますか？ いいえ、全く解決しません！対処療法では、問題は解決しません。ますます状況が悪くなるのです。彼に必要なのは根本療法です。私たちは、全能の神、天地万物の所有者に対して、何を求めますか？「少しばかりのお金をあわれんで下さい……」そんな祈りをしていますか？あなたは教会に来て、何を求めていますか？「クリスチャンになって、ちゃんと信じればお金がもうかるかも、何かもらえるかも」という動機で、教会に行っていますか？それではまるで「こじきクリスチャン」「霊的に歩けない信者」のようです。私たちはイエス・キリストを信じたら、みな神

の子どもです。全地の王なる神が私たちの父であるなら、私たちはその王子、王女です！信じますか？天地万物は父のものであり、父のものはみな、私たちのものです。王子、王女だとしたら、王子らしく、王女らしく、誇りを持って、堂々と生きていきましょう。

2、ペテロが与えることができるものは何ですか？

(使 3:6)

(解説) ペテロが与えたものは金銀ではなく「イエス・キリストの名」でした。そうです。これこそが根本療法です。このイエスの御名にこそ力があるのです。この御名の力によって、全てが与えられます。救い、罪の赦し、心と体のいやし、解放、勝利、満たし、サタンと呪いの追放、人生の全ての問題を解決します！ハレルヤ！！・・・あなたは今、イエスの御名を持っていますか？もし持っているなら、あなたは今もうすでに全てを所有しているのです。イエスの御名の中に、全てがあるからです。あなたが今必要なのは「少しばかりの金銀」ではありません。イエスの御名の力です！それを求めて下さい。

3、何によってその男を歩かせたと、人々は思いましたか？

(使 3:12)

(解説) 人々は、ペテロが「自分の力や敬虔さによって彼を歩かせたかのように」思っていました。しかし、その男を歩かせたのは、ペテロの力や敬虔さによってではありません。人間の力、知識、善行、人徳、霊性、人格や信仰のレベル、そういったものではなくて「イエスの御名の力」が、彼を歩かせたのです。人々があなたをほめるとき、私たちは注意しなければなりません。高慢になって「私の力でやった」と思ってはなりません。「全ては主がなして下さいました」と告白すべきです。私たちは神の道具にすぎません。全ての力は神からのものです。

4、何がその男を強くしましたか？

(使 3:16)

(ピリピ 4:13) 私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです。

(解説) 「イエスの名が、その名を信じる信仰のゆえに」その人を強くしました。「イエスによって与えられる信仰」が、その人を完全にしたのです。私たちに必要なのは、この「信仰」つまり神に対する絶対的な信頼です。神にできないことは、何一つありません。今あなたがぶつかっている色々な問題・・・経済問題、健康問題、将来問題、家庭問題、人間関係問題などは、全てイエスの御名の力によって解決できるのです。信じますか？「でも、私には何もできない」と言うてはいけません。「私を強くしてくださる方(イエス様)によって、私はどんなことでもできるのです」「イエスの御名によって、何でもできる！」と自分自身に宣言して下さい。あなたの信仰の通りになりますように。

5、 私たちはなぜ、悔い改めなければなりませんか？

(使 3:19-21)

(解説) 罪がぬぐい去られるために、悔い改めて神に立ち返らなければなりません。それは「主の御前から回復の時」が来るからです。この「回復の時」とは、主イエスの再臨の時を指しています。主の再臨は今、近づいています。だからこそ、早く悔い改めて、心を変えるべきです。天国に入れるように、罪をぬぐい去ってもらわなければなりません。どんな罪でしょうか？神への不従順、不信仰、神を頼らず他のもの（お金や人間）を頼る罪、「できない」という否定的な考え、恐れ、心配も罪です。「万物が改まる時」神のさばきの座で、私たちは主からこう問われます。「おまえはなぜわたしを信頼しなかったのか？」主の再臨が近いのなら、私たちは今日一日、どのように生きるべきでしょうか？私たちは不信仰、心配の罪を悔い改めて、主に信頼する生き方をしていきましょう。

6、 主イエスはなぜ遣わされましたか？

(使 3:26)

(解説) 主イエスが遣わされたのは、私たち一人一人を悪から立ち返らせて、祝福にあずからせるためです。私たちが悔い改めて、祝福を受けるために、イエスはこの地に來たのです。罪を悔い改めて、イエス様を信じる人は、祝福を受けます。イエス様は、あなたを祝福するために來たのです。悔い改めは、祝福です。罪を悔い改めて、悪から立ち返って、イエス様を信頼する人は、大きな祝福を受けます。地上でも祝福され、天国でも永遠の祝福を受け継ぐのです。信じますか？

7、 歩けないこじきクリスチャンか、それとも、イエスの御名によって立ち上がり力強く歩むクリスチャンか、あなたはどちらを選びますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

4章 迫害されるとき大胆でありなさい (使徒4章)

まず、使徒の働き4章全部を読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、 私たちを救うことができる唯一の名は、何ですか？

(使 4:12) この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。

(解説) あなたを救えるのは、誰ですか？あなたが今ぶつかっている問題から救い出せるのは何ですか？家族？親戚？友人？お金？知識？権力者？宗教儀式？社会活動？善行？……いいえ、世の何者も、あなたを救うことはできません。私たちを救えるのはただ一人、イエス・キリストだけです。他のものは、何も頼りになりません。天地の造り主、全能の神、罪と死とサタンに勝利したイエス・キリストだけを信じて、抛り頼みなさい。この方こそ、私たちの唯一の救い主です。信じますか？

2、 ペテロたちは無学な普通の人なのに、なぜ大胆でしたか？

(使 4:13)

(解説) ペテロとヨハネは、漁師出身でした。お金も権力もない「無学な普通の人」でした。なのに、最高法院にいる国の指導者たちの前で、大胆に証ししたのです。なぜ彼らは、そのようにできたのでしょうか？……それは「イエスとともにいた」からです。彼らは3年半、イエスと共に生活し、イエスのことば直接聞き、その行いを見て来ました。そしてイエスの死と復活を直接目撃しました。そして今も、キリストの御霊、聖霊によって満たされて、主と共に語っているのです。主イエスは今も聖霊によって、私たちと共にいます。聖霊に満たされるときに、私たちは大胆になることができます。恐れるものは何もありません。「私は無学で、お金も地位も経験もない…」などと言い訳しないで下さい。イエスは今、あなたと共にいますか？共にいるなら、それでもう十分なのです。

3、 神に聞き従うのと、人に聞き従うのでは、どちらが正しいですか？

(使 4:18, 19)

(Ⅱテモテ 4:2) みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。

(マタイ 10:28) からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません。むしろ、たましいもからだもゲヘナで滅ぼすことができる方を恐れなさい。

(解説) 神は「宣べ伝えなさい」と命令しています。しかし人は「イエスの名によって語ることも教えることも、いっさいしてはならない」と命令します。どちらに聞き従うべきでしょうか？あなたの家族、親

戚、先生、上司、役所、大家さんが「語るな」と言ったら、あなたはどうしますか？神と人、どちらに聞き従うのが、神の御前に正しいのか、あなた自身が判断して、決めて下さい。人たちは、いかにも正しそうに聞こえる、色々な理由を付けて、伝道をやめさせようとするでしょう。「今は周りの事情が良くない」「他の人との関係も大切だ」「住民感情を害して、迷惑をかけてはならない」「今は関係作りだけして、後で語れば良い」「そんなことをすれば後で問題になる」「今は状況が良くないから、静かにしているほうが良い」などなど……。しかし、人間を恐れてはなりません。神だけを恐れて、その命令に聞き従いなさい。それこそが正しい道です。

4、自分の見たことや聞いたことを、話さないでいられますか？

(使 4:20)

(解説) あなたはイエス・キリストの救いを体験しましたか？主の愛、恵み、あわれみを、あなたの人生の中で見て、みことばを通して主の確かな御声を聞きましたか？主と出会ったときの喜びを、覚えていますか？……もし体験していなかったら、その人に伝道をさせようとしても、それは無理です。知らないものを、知らせることはできません。しかし一度主を知ったのなら、それを知らせずにはられません。「語るな」と言われても、内側からあふれ出て、やめることができないのです。それが福音です。もしあなたが今、伝道していないのなら、あなたはまだイエスの救いを体験していないか、それともその恵みをすっかり忘れてしまっているか、そのどちらかです。あなたは主イエスの救いの喜びを、日々体験していますか？あなたが見て、聞いたそのイエスの愛と恵みを、見て聞いた通り、そのまま証しして下さい。それが証しの力です。

5、脅かしがあるとき、彼らはどのように祈りましたか？

(使 4:24)

(使 4:29, 30)

(解説) 迫害にあったとき、彼らは「この迫害をなくして下さい」とは祈りませんでした。そのような迫害の中でむしろ「みことばを大胆に語らせて下さい。癒しとするしと不思議をを行わせて下さい」と祈ったのです。何という強い信仰でしょう！あなたは問題にあったとき、どのように祈りますか？「この問題をなくして下さい」と祈りますか？「今は問題があるから、伝道は少し休みます」と言いますか？いいえ、むしろこう祈りましょう。「主よ、この問題を通して、あなたのみわざを大胆に証しさせて下さい。この問題のただ中で、あなたのしるしと奇跡を起こして、あなたの栄光を現して下さい！」問題から逃げるのではなく、問題に立ち向かう祈りをして下さい。サッカーでも、守るだけでは得点できません。攻めるときこそ、勝利を得ることができるのです。

6、彼らが祈ると、神はどのように応えて下さいましたか？

(使 4:31)

(解説) 彼らが祈り終わると、集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語り出しました。神は祈りに応えて下さいました。迫害があるとき、もっと祈るようになります。祈るとき、聖霊に満たされて、もっと伝道します。もっと伝道するとき、救われる人がますます起こされて、もっとリバイバルするのです！迫害は、リバイバルのチャンスです。困難なときこそ、神が働くのです。

こんな話を聞いたことがあります。「中国をリバイバルさせた人は誰か？」その答えは「毛沢東」だそうです。中国を共産化して、キリスト教を大迫害した毛沢東が、なぜ「リバイバルさせた人」なのでしょう？

……毛沢東はまず、外国人の宣教師をみな追放しました。それによって、逆に現地人の教会が自立するようになりました。

毛沢東は牧師をみな牢屋に入れました。それによって教会員や一般信徒の指導者が成長しました。牧師たちも牢屋の中で伝道して、罪人たちがたくさん主を信じました。

毛沢東は教会堂をみな破壊しました。それによって、家の教会がもっと増えて倍加しました。

毛沢東は聖書を火で燃やしてしまいました。それによって、信者たちはみことばを全部暗記するようになりました。

毛沢東は中国全土に道路を整備しました。その道路を通して、伝道者たちは全国を巡回旅行して伝道しました。

毛沢東は「普通話」という全国標準語を作って広めました。そのおかげで、伝道者たちは色々な地方や奥地の田舎に行っても言葉が通じるので、福音をもっと効果的に語ることができました。

毛沢東は文化革命によって仏教や儒教の伝統を破壊しました。それによって、偶像や民俗信仰がなくなって、霊的にもっと伝道しやすくなりました。

……このようにして、共産化された中国の中で、地下教会はますます強くなって、多くの人々が主イエスを信じるようになって、大リバイバルとなったのです！ハレルヤ！！・・・主の教会は、どんなに迫害されても滅びません。迫害の中で、むしろ強くされて、勝利するのです。

7、迫害や困難があるとき、あなたはどのようにしますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

5章 神だけを恐れなさい (使徒5章)

まず、使徒の働き5章全部を読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、アナニアとサッピラは、なぜ神のさばきを受けましたか？

(使5:3, 4)

(解説) アナニアとサッピラは、自分の土地を売って、その代金の一部を自分のために取っておき、一部だけを持って来て献金しました。そしてそれが代金の全部であるかのように見せかけたのです。もし彼らが「これは地所の代金の一部です」と言ってささげていたら、そのほうが正直だったでしょう。そうしたら、神にさばかれることもなかったでしょう。それはもともと彼らのものであり、売った後でも彼らが自由に使えるお金だったのです。たとえそれを全然ささげなくても、決して罪とはならなかったでしょう。しかし彼らはそのお金が代金の全部のように見せることによって、他の人々から「あの人は全てをささげ切った、信仰の立派な人だ」と思われたかったのです。しかし、それは聖霊を欺いて主の御霊を試みる、大きな罪でした。それで、神にさばかれて、死んだのです。……私たちの人生も同じです。神様に対して「私の人生の全てをささげます」と言いながら、その一部を自分のために取っておいたら、それは神の御前にウソをついているのと同じです。心の思いの一部、自分の計画、願い、欲望、「これだけは譲れない」という固執、神が喜ばないと知っていながら捨て切れないものなど……。そういったものを自分に残しているのだったら、むしろ「私は一部しかささげていません」と言ったほうが正直です。一部を残しているのに、全てをささげ切った人かのように見せてはいけません。他人に良く見せるため、「立派な人だ」と思われるために、献身しているふりをしているとしたら、それは人を欺いているのではなく、神を欺いているのです。

2、この事件を聞いた全ての人たちは、どのように感じましたか？

(使5:5)

(使5:11)

(箴言1:7) 主を恐れることは知識の初め。

(解説) アナニアとサッピラが神にさばかれて死んだことを聞いた全ての人たちには、「大きな恐れ」が生じました。なぜなら、神は自分をもさばくかもしれないと思って、神を恐れたのです。「神を恐れる」というのは「神は残酷な方だから怖い」と思ってビクビクする、という意味ではありません。神は愛なる方であると同時に、聖なる方、義なる方です。だから罪に対しては、きびしくさばく方です。神を恐れるというのは、その聖なる神のさばきを恐れる、という意味です。だから、神を正しく恐れると、罪を避けて、正しく生きようになります。それこそが知恵です。「主を恐れることは知識の初め」と書いてある通りです。他の人が神のさばきを受けているのを見たら、その人を批判するのではなく、自分自身を省み

る時とすべきです。もしかしたら自分もさばきを受けるかもしれないと思って、悔い改める機会として下さい。それが、神を恐れる人の態度です。

3、大祭司とその仲間たちは、なぜ使徒たちを捕らえましたか？

(使 5:16-18)

(解説) 使徒たちによって、多くの奇跡が行われて、信じる者がますます増えていったのを見て、大祭司とその仲間たちは「みな、ねたみに燃えて」使徒たちを捕らえました。大祭司たちは、民の指導者です。民衆が、自分よりも使徒たちのほうに行くので、彼らをねたみ、怒って、憎んだのです。人間のねたみというは、恐ろしいものです。私たちは自分と他人を比較するとき、ねたみ、うらやみ、しっとして、憎むようになります。自分の教会は人数が少なく大変なのに、他の牧師の教会が成長するとき。自分はテストに落ちたのに、他の人は合格したとき。自分は親から叱られてばかりなのに、弟がほめられたとき。自分はまだ独身なのに、友人から「結婚しました」というハガキが届いたとき……。そのとき、あなたはどうか反応しますか？その人を祝福して、共に喜ぶことができますか？他人と比較している限り、私たちは決して満足できません。他人と比較するのをやめるとき、私たちは平安を回復できます。「人は人、自分は自分」です。神はその人その人にそれぞれ特別な計画を持っておられます。神の愛は公平です。公平なる神の愛を信じて、人をねたむ罪を避けましょう。

4、人から出た計画か、それとも神から出た計画かを、どのようにして見分けることができますか？

(使 5:38, 39)

(ヤコブ 4:11, 12) 兄弟たち、互いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟について悪口を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口を言い、律法をさばいているのです。もしあなたが律法をさばくなら、律法を行う者ではなく、さばく者です。律法を定め、さばきを行う方はただひとりで、救うことも滅ぼすこともできる方です。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。

(解説) 人から出た計画ならば、自滅してしまうでしょう。しかし、神から出た計画ならば、滅ぼすことはできません。その人、あるいは団体、グループがやることが、人から出たものか、神から出たものか、私たちにはわかりません。神は悪事さえも用いて益とされる方です。だから、その計画を批判したりする必要はありません。そこから手を引いて、放っておきなさい。もしそれを妨害していると、知らないうちに自分が神に敵対する者になってしまいます。神を恐れて、神のさばきにゆだねて下さい。他人をさばくことは、人間がすべきことではありません。それは神がすべきことです。私たちはさばき主ではなく、神ただおひとりだけがさばき主です。神がすべきことを自分がやっているとしたら、それは神の座に自分が座っていることです。それこそ神の敵となる、恐ろしい高慢の罪です。私たちは、自分の分をわきまえて、謙遜に、神の導きに全てをゆだねましょう。

5、使徒たちはむちで打たれて釈放された後、どのようにしましたか？

(使 5:40-42)

(Ⅰ コリント 9:16) 私が福音を宣べ伝えても、私の誇りにはなりません。そうせずにはいられないのです。福音を宣べ伝えないなら、私はわざわいです。

(解説) 使徒たちはむちで打たれて、「イエスの名によって語ってはならない」と命じられたうえで、釈放されました。その後、彼らはどうしたのでしょうか？ がっかりして家に帰り「もう伝道はほどほどにしよう」と言ったのでしょうか？ いいえ！ 何と、彼らは「御名のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら」出て行き、「毎日」イエスがキリストであると教え、宣べ伝えることをやめなかったのです！ 何という驚くべき信仰、驚くべき大胆さでしょう！ なぜ彼らはそのようにできたのでしょうか？ それは、神を恐れたからです。人を恐れるより、神のさばきを恐れたのです。宣教しないことは、神の命令に従わないことです。パウロは「宣教は、どうしてもしなければならないことで、もししなかったら、わざわいだ」と言いました。そのことを知っているから、どんな迫害があっても宣教を続けることができたのです。神を恐れる人は、おくびょう者ではありません。神だけを恐れる人は、強い人です。神のさばきを恐れ、罪を避け、正義に堅く立ち、どんなサタンの攻撃も、他人の迫害をも恐れず、信仰の勇者です。神はそのような人を用いて、ご自身の宣教のみわざを成し遂げられるのです。

6、神を恐れるなら、あなたはどのように生活しますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

6 章 聖霊の方法に従いなさい (使徒 6 章)

まず、使徒の働き の 6 章全部を読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、ギリシア語を使うユダヤ人たちは、なぜヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を出しましたか？

(使 6:1)

(解説) 弟子たちが増えるにつれて、教会の中で問題が起きて来ました。ギリシア語を使うユダヤ人、つまり外国出身のユダヤ人のやもめたちが、毎日の配給、食事を十分に与えられず、差別されていたのです。教会は色々な人が集まるので、色々な問題が起きて来ます。食事やお金の問題、プライドと感情の問題、権力争い、ちょっとした意見の違い、偏見や誤解などによって、グループに分かれて批判し合い、対立し、分裂します。「教会は清い人たちの集まりだ」なんて思っていると、後で大きな失望を味わいます。教会は「罪人の集まり」です。そして、この地上に、全く問題のない教会など 1 つもありません。どんなに良い教会に見えたとしても、必ず問題があります。そのような問題を、対処療法・臨時措置でフタをするのでは、根本的な解決にはなりません。その世的・肉的な問題の本質を霊によって見分けて、聖霊の方法で解決することが大切です。

2、使徒たちは、何の奉仕を優先しましたか？

(使 6:2-4)

(解説) 使徒たちは「では、私たちが裁判して、食卓のことを決めましょう」とは言いませんでした。「神のことばを後回しにして問題に取り組むのは良くない、自分たちは祈りとみことばの奉仕に専念する」と言ったのです。使徒たちは、優先順位を知っていました。「祈りとみことば」は教会のいのちです。これを後回しにすると、後で大きな問題を引き起こすことになります。教会の行事やプログラムも、もちろん大切です。しかし、たとえ良いことであっても、やるが多すぎると、それに追われて忙しくなり、本当に大切なことができなくなります。次善は最善の敵です。私たちは「緊急だけどあまり重要でないこと (例えば、電話、メール、テレビやインターネットを見る、色々な集会や行事に行くことなど)」を減らして「緊急ではないけど重要なこと (退いて祈る、みことばを聞く、主との関係、人間関係を築く、霊的充電、休養など)」のために、もっと時間と労力を使わなければなりません。毎日の生活のやることをもう一度チェックして、人生の優先順位を考え直しましょう。「祈りとみことば」を通して主と交わり、主の御声を聞きましょう。そこから、問題の解決が始まります。

3、食卓のことに仕える仕事は、誰がやりますか？

(使 6:2, 3)

(ルカ 22:27) 食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょうか。食卓に着く人ではありませんか。しかし、わたしはあなたがたの間で、給仕する者のようにしています。

(解説) 食卓のことに仕える仕事は、簡単な仕事ではありません。毎日貧しいやもめたちの世話をして、食事を公平に配るのです。それは大変で、人がやりたがらない仕事です。しかし、これこそが霊的な奉仕なのです。イエス様は弟子たちのために、自ら給仕する者、しもべのように仕える者となって下さいました。真のリーダーは、謙遜に仕える人です。母親は、子どもの指導者ですが、しもべのように仕えています。子どものために、食事を作り、皿を洗い、洗濯をし、服を着せて、家をそうじして……。しもべとなる人は、天国で一番偉い人です。しもべの奉仕はみな、神のために仕える、聖く貴いミニストリーなのです。

4、執事たちは、どのような人が選ばれましたか？

(使 6:3)

(Ⅰテモテ 3:10) この人たちも、まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事として仕えさせなさい。

(解説) この執事の仕事のためには、「御霊と知恵に満ちた評判の良い人たち」が選ばれました。教会の執事や役員は、世の基準で、人気投票で選んではいけません。お金や社会的地位、学歴があるか、話がうまいか、みんなに愛想がいいか、仕事ができるか……。そういった基準で選ぶと、後でその人が傲慢になって教会を批判して、教会員をコントロールして、分裂の種を蒔き、大変な問題を起こすようになります。だから、聖書の基準に従って、よく審査すべきです。御霊の聖さに満ちた人、神の知恵によって判断できる人、評判が良く、人から信頼され、健全な人間関係を築ける人を選ばなければなりません。「霊的に成熟した人」とは、社会関係的、情緒的にも成熟した人のことです。では、そのような人をどうやって見分けるのでしょうか？それは、時間をかけて見ると、だんだんわかるものです。長く付き合っていると、その人の本性が見えてきます。だから、他の教会から移って来たばかりの人は、どんなに信仰が良さそうに見えても、すぐに執事や役員の職につかせてはいけません。その人が本当に誠実か、まだわからないからです。何年も一緒に同じ教会で奉仕をしていく中で、その人の長所も短所も良く分かって、また共同体への忠実さが試されて、みんなから認められるようになって、それからリーダーに選ばれていくのです。

5、その後、神のことばはどのように広まって行きましたか？

(使 6:7)

(解説) 執事 7 人を選んで、使徒たちが祈りとみことばに集中するようにした後、神のみことばはますます広まっていき、弟子の数が非常に増えていきました。そして以前は敵であった祭司たちまでもが、次々

と信仰に入りました。みことばを優先したから、みことばが広がっていくのは当然です。教会は、みことばの宣教を最優先にすべきです。それこそが教会の本当の使命だからです。教会内のゴタゴタにいつも巻き込まれて、教会員の世話に追われて、「うちの教会はまだ外に出て行ける状態ではない」などと言って内向きになってはいけません。内側のことばかりしていたら、いつまでたっても外へは行けません。まず外へ出て、みことばを伝えなさい。そうするときに内側もだんだん整って、成長していきます。

6、ステパノは、どのような人でしたか？

(使 6:5) 信仰と聖霊に満ちた人ステパノ、

(使 6:8) ステパノは恵みと力に満ち、人々の間で大いなる不思議としるしを行っていた。

(使 6:10) しかし、彼が語るときの知恵と御霊に対抗することはできなかった。

(使 6:15) 彼の顔は御使いの顔のように見えた。

(解説) ステパノは執事の一人として選ばれました。彼は信仰と聖霊、恵みと力に満ちて、すばらしい奇跡を行っていました。反対する人たちが彼と議論をしても、彼が知恵と御霊によって語っていたので、対抗することができませんでした。敵たちでさえも、彼の顔が天使のようだと認めたのです。……聖霊の方法はいつも「人」です。聖霊に満たされた人、信仰的に成熟した人、主の恵みと力と知恵に満たされた人を通して、神は働かれます。教会の問題は、何かのプログラムや、本に書いてあるマニュアルで解決するものではありません。一人の神の人がそこに存在するだけで、問題が収まるのです。私たちは「何をするか (Doing)」よりも「どういう人であるか (Being)」をもっと追求して行きましょう。あなたの存在を通して、教会が変わり、世の人々が変わり、国が変えられて行きます。

7、問題があるとき、あなたはどのようにしますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

7章 イエスのために人生をささげなさい (使徒7章)

まず、使徒の働き7章51節から60節までを読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、ステパノは、なぜ先祖たちの歴史を話しましたか？

(使7:51-53)

(解説) ステパノは、先祖たちの歴史、アブラハムからソロモンまでの、イスラエル民族の長い歴史を話しました。イスラエルの民は、いつも聖霊に逆らい、預言者を迫害し、律法を守りませんでした。ステパノはその歴史を話すことによって、彼らが、過去に先祖たちが犯した罪を思い出し、へりくだって、今の自分たちの罪を悔い改めるように願ったのです。……私たちも自分の「過去」を忘れてはいけません。自分が昔、いかに罪深く、悲惨で、苦しかったか。そしてそこから悔い改めて、主によって罪赦されたとき、その恵みにどんなに感謝したか。苦しみの中で主が教えて下さった教訓など……。日記や記録をつけておくと、思い出すのに役に立ちます。私たちは、過去の自分の歴史を思い出すときに、謙遜になることができます。今の自分の生活を反省し、悔い改めて、過去と同じ失敗を繰り返さないようにと、注意するようになります。過去を思い出すのは、未来のためです。私たちは、自分の過去を振り返って、今の自分を省みて、未来に向けて前進する人になりましょう。

2、人々はなぜ、はらわたが煮え返る思いで、耳をおおって、ステパノを石で打ち殺しましたか？

(使7:54)

(使7:57, 58)

(解説) ステパノの話聞いても、人々は悔い改めませんでした。かえって、人々は怒り、歯ざしりし、耳をおおって、ついには彼を殺してしまいました。それは、ステパノが言っていたことが間違っていたからではありません。言われたことが当たっていたから、怒ったのです。まさに凶星だったからこそ、むきになって反発するのです。心刺されて受け入れたくないから、耳をふさぐのです。自分の過ちが明らかになるのを恐れるので、相手の言うことを全部否定して、心をかたくなにするのです。相手が自分のために何か耳の痛いことを言うときに、それを正直に認めて、謙遜に受け入れる人は幸いです。そのような人はすぐに悔い改めて、自分の道を正して、どんどん成長することができます。もちろんそれは、簡単なことではありません。しかし、謙遜になって悔い改めることは、祝福への道です。私たちは、相手が何かを言って来たとき、感情的には反発したくても、まずは一旦受け止めて、心を柔らかくして、そこから何かを学び取るようにしましょう。

3、主イエスは神の右で、なぜ立っていましたか？

(使 7:55, 56)

(ローマ 8:34) だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。

(解説) 主イエスは、復活した後、天に上げられて、神の右の座に着かれました(マルコ 16:19)。そしてそこで、私たちのためにとりなし祈って下さいます。しかし、ステパノが今殺されようとしているのを見て、主イエスはじっと座っていることができずに、その座から立ち上がりました。彼のことを思うあまり、立ち上がらずにはいられなかったのです。主イエスは今も、天の神の右に座って、私たちのことを見つめています。私たちのためにとりなして、今も祈って下さっているのです。しかし、私たちが本当に危機の時には、立ち上がって祈ります。この主のとりなし祈りと助けがあるからこそ、私たちは信仰を守って生きることができるのです。

4、ステパノの死を見たサウロは、後でどのような人になりましたか？

(使 7:58)

(ヨハネ 12:24) まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。

(解説) ステパノを石で打ち殺した人たちは、自分の上着をサウロという青年の足もとに置きました。サウロは、ステパノが死ぬのを、じっと見ていました。その場面は、印象強く彼の目に焼き付いていたことでしょう。サウロはステパノを殺すことに賛成し、教会を荒らし、信者を次々に牢に入れました。しかし後になって、ダマスコの途上で主イエスに出会い、変えられて、主を信じるようになりました。彼は主を信じた後、ステパノの殉教の場面を、何度も思い出したでしょう。そして、自分が犯した罪の大きさを悟り、何度も悔い改めたでしょう。そして、自分もステパノのように、主イエスのために命をささげる人になろうと決心したに違いありません。このサウロが、後に使徒パウロとなって、宣教者として多くの人々を救いに導く人となったのです。ステパノの殉教は、無駄ではありませんでした。ステパノは一粒の麦となって死にましたが、それによって使徒パウロが生まれ、後に多くの実を結んだのです。種は地に落ちて、すぐには何も起こらず、無駄に捨てたように見えます。しかし、神の時が来たら、芽を出して、生長し、実を結んで、後に大収穫となるのです。あなたが主のためにした犠牲と献身は、決して無駄にはなりません。後に豊かな実を結ぶことを信じて、人生をささげましょう。

5、ステパノは、自分が死ぬとき何と言いましたか？

(使 7:59, 60) こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った。「主イエスよ。私の霊をお受けください。」そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、彼は眠りについた。

(ルカ 23:34) そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何を

しているのかが分かっていないのです。」

(ルカ 23:46) イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

(解説) ステパノが死ぬ直前に言った言葉は、まさに主イエスが十字架上で言った言葉と同じ内容でした。主イエスもステパノも、自分の霊を神の御手にゆだねました。自分の命が自分のものではなく、神のものだと知って、平安を得たのです。そして、2人とも、自分を殺そうとする者たちを赦す祈りをささげました。主に人生をささげた人は、主と同じ心になります。主がそうしたように、自分もするようになります。自分の霊を主にゆだねて平安を持つからこそ、敵をも赦し愛することができるのです。霊的成長の究極的目標は「主の似姿に変えられていく」ことです。これはとても高い目標です。しかし、聖霊に満たされつつ、それを目指していきましょう。

6、「眠りについた」というのは、どういう意味ですか？

(使 7:60)

(Ⅰテサロニケ 4:13, 14) 眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずですよ。

(解説) 主イエスにあって「眠った」ということは「後に天国で目を覚ます」ということです。そのときには主と共に生きて、永遠の祝福に入るのです。この天国の希望があるからこそ、歴史上今まで多くの信仰の勇者たちは、自分の命を主にささげて殉教できたのです。死ぬことはもちろん、悲しいことであり、心が沈むことです。しかし、主の復活を信じる人は、死んでも生きるのです。眠っても、永遠の中で目を覚ますのです。これこそが、私たち主イエスを信じる者の最大の希望です。そして「十字架の後に復活の勝利がある」と信じる者は、今の生活の中で、生きながら殉教することができます。自分を捨てて、犠牲を払い、主に人生の全てをささげて生きる、それが殉教です。そのような「殉教者の生活」をした人は、後で天国で大きな報いを受けます。天国での栄光の冠を目指して、この地上での信仰の道のりを、最後まで走り続けましょう。

7、あなたは自分の生活の中で何を主にささげますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

8 章 聖霊の導きを受けなさい (使徒 8 章)

まず、使徒の働き 8 章全部を読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、迫害によって散らされた人たちは、どのようにしましたか？

(使 8:1)

(使 8:4)

(解説) ステパノが殺されたその日に、エルサレム教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の信者はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされました。その散らされた人たちは、恐れて、落胆して、信仰を捨てたのでしょうか？いいえ、何と彼らは、散らされたその所々で、みことばの福音を伝えながら巡り歩いたのです！何という強い信仰でしょう！以前はエルサレムだけで伝道していましたが、迫害が起きて散らされてからは、伝道がもっと拡大して、福音がもっと広まったのです。ハレルヤ！これこそが主の方法、聖霊の導きです。1 か所だけにずっととどまっているのは、主の御心ではありません。主は迫害や問題など、色々な方法を用いてでも、信者を各地に散らして、福音を拡大させます。主の教会は、迫害されればされるほど、もっとリバイバルするのです。

2、サマリアの町に、なぜ大きな喜びがありましたか？

(使 8:5-8)

(解説) ピリポはサマリアの町に行って、キリストを宣べ伝えました。そして汚れた霊を追い出し、中風の人や足の不自由な人をいやしました。そのようなしるしと奇蹟を見て、人々はみなそろって関心を抱き、福音に耳を傾け、キリストを信じました。それで、その町に大きな喜びが起こったのです。彼らが喜んだのは、霊肉共に救いを「体験」したからでした。キリストの救いは、単に頭の中で知的に理解するだけではありません。それは、喜びを伴った霊的体験です。あなたは、イエス・キリストを最初に信じたときの救いの喜びを、今も覚えていますか？そのときの体験を、今も証ししていますか？それを忘れないように、自分の救われたときの体験を、何度もくり返して他の人に話して下さい。話すたびに、そのときの喜びを思い出し、主への初めの愛が回復します。救いの喜びは、クリスチャン生活の基礎中の基礎です。これがないときに、律法主義的、パリサイ的になって来ます。救いの喜びがあるなら、主のために何でもしたくなるのです。

3、魔術師シモンは、聖霊を受けさせる権威をなぜ求めましたか？

(使 8:9-11)

(使 8:18-23)

(解説) 魔術師シモンは、聖霊を与える権威を、お金で手に入れようと思いました。それは、自分の名誉欲のため、自分が何か偉大な強い者になって、人々に認められたいと思ったからでした。しかし、聖霊の賜物は、自分のために使うものではありません。主のため、他の人々に仕えるため、キリストのからだである教会のために使うべきものです。御霊の賜物(能力)は大切ですが、それよりも、御霊の実(愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制)のほうが、もっと大切です。御霊の実を結ぶ人、自分の名誉欲、プライド、成功欲を十字架につけた人のみが、御霊の賜物を正しく使いこなすことができます。いくら賜物があっても、自分の欲のために使うなら、それが後で自分を滅ぼすことになります。お金の力で教会内に自分の影響力を及ぼそうとしているなら、悔い改めるべきです。その心が神の前に正しくないからです。神の前に聖く正しい動機を持って、御霊の賜物を求めましょう。

4、ピリポは主の使いの命令に、どのように応答しましたか？

(使 8:26, 27)

(解説) 主の使いはピリポに「立ってガザに下る、荒野の道に出なさい」と命令しました。ピリポは、すぐに従順して、立って出かけました。今サマリアは大リバイバルして、自分の働きも成功して、せっかく軌道に乗って来たのに、その全てを捨てて、荒れ果てた、何もない荒野の道へ行けと命令されたのです。それは決して、簡単なことではなかったでしょう。しかしピリポは、自分の働きの野望を捨てて、すぐに従順したのです。宣教の働きは、自分の所有物ではありません。それは主のものです。私たちは、主が離れるように命じるならばいつでも、それを手放すように、心の準備をしておくべきです。主に従ってゆだねるならば、主はあなたの築いてきた働きを責任持って守って下さり、そしてあなたに新しい使命を与えて下さるでしょう。

5、読んでいる聖書箇所の意味を、どのようにしたらわかりますか？

(使 8:30-35)

(解説) エチオピアの宦官は、礼拝の帰りにイザヤ書 53 章を読んでいましたが、その意味がわかりませんでした。彼には「導いてくれる人」が必要だったのです。それでピリポに質問しました。「この箇所は、誰について言っているのですか？」そこでピリポは、その箇所がまさにイエス・キリストの救いのことを言っている、と教えたのです。私たちも聖書を読んでいるときに、わからないことがたくさんあります。私たちにも、導いてくれる人が必要です。そのようなときには、1人で悩まずに、教会の先生や先輩たちに、自分からどんどん質問して下さい。「いつ、どこで、誰が、なぜ、どうやって」を使って質問して、みことばの意味を考えて下さい。それを聖書の余白やノートにメモしておいて下さい。そうするときに、聖書をより深く理解するようになって、信仰が成長します。

6、いつバプテスマ(洗礼)を受けたら良いですか？

(使 8:36-38)

(解説) エチオピアの宦官は、ピリポからイエスのことを聞いて、すぐに信じました。そうしたら水のあ
る場所に來たので、ピリポに「私がバプテスマを受けるのに、何か妨げがあるでしょうか」と聞きました。
そこで2人は水の中に入って、ピリポは彼にバプテスマを授けたのです。バプテスマを受けるには、主イ
エスを「心底から信じるならば、よいのです」(使 8:37) 条件は「信じます」という、告白一つだけ
です。水さえあれば、その場でOKです。他に何のさしつかえありません。「もっと後で、教会に毎週通う
ようになってから、家族が賛成してから、もっとちゃんとわかるようになったら」などと言いつけて、遅
らせてはいけません。人間的な基準で「あの人はまだ早い」などと勝手に判断してはいけません。バプテ
スマは信仰生活のスタートです。スタートは、早ければ早いほど良いのです。「変えられてから信じる」
のではなく「信じてから変えられる」のです。早く主イエスを信じて、すぐにバプテスマを受けるように
勧めましょう。

7、聖霊はピリポをどのように導きましたか？

(使 8:39, 40)

(解説) 2人が水から上がったとき、聖霊がピリポを連れ去ったので、宦官はピリポを見ませんでした。
それからピリポはアゾトに現れ、全ての町々を通して福音を宣べ伝え、カイザリアに行きました。彼は、
エチオピアの宦官たった一人に伝道するために、ガザへの道に導かれ、そして任務が終わったらすぐ連
れ去られました。彼は最初から最後まで、聖霊の導きに従いました。しかし、その一人を通して、福音が
エチオピアにもたらされ、後になってエチオピアはキリスト教国となったのです。聖霊に従うときに、聖
霊が出会いを与え、力を注ぎ、聖霊ご自身がその働きを成し遂げられます。宣教とは、聖霊の働きです。
私たちは主の道具にすぎません。だから、私たちは自分の計画や肉の欲、野望で勝手に動くのではありません。
宣教の主である聖霊の導きに敏感になって、聖霊の計画、命令、サインに従って進みましょう。

8、あなたは聖霊の導きに、どのように従いますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全
員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

9章 主の選びの器 (使徒9章)

まず、使徒の働き9章1節から31節を読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、サウロはなぜ、主の弟子たちを迫害しましたか？

(使9:1, 2)

(解説) サウロは、イエスの教えは間違っていて、その教えを信じている弟子たちを悪い者だと思っていました。そして、その悪いイエスの弟子たちを迫害し殺害するのは良いこと、正しいことだと堅く信じていました。だから熱心に「脅かして殺害しようと息巻き」迫害したのです。そしてそれこそが、神のためだと信じていました。「何事でも熱心にやることは良い」というものではありません。間違ったことに熱心になると、恐ろしいことになります。聖書全体に合っているか見分けもしないで、間違った考えや教理、主義主張、思想にのめりこむと、それが人生を間違った道へ導き、自分を滅ぼすことになります。私たちは、何が正しいのかを見分けて、正しいことに対して熱心になるべきです。

2、サウロは三日の間、何を祈っていたのでしょうか？

(使9:9-12)

(解説) サウロはイエスに出会った後、目が見えなくなって、三日間断食して祈っていました。彼はこの三日間、何を考えていたのでしょうか？「自分が今までしてきたことは、間違っていたのだろうか？」「もしイエスが正しいのだとしたら、私は何をすべきだろうか？」おそらく、そのようなことを思いめぐらしていたのではないのでしょうか。そのときに彼は「アナニアという名の人が入って来て、自分の上に手を置き、再び見えるようにしてくれる」というのを幻で見ました。神は彼の祈りに応えて、サインを与えて下さったのです。私たちも時には、自分の人生を深く考え直す時が必要です。今までの自分の人生の方向が正しいかどうか、神の目的に向かってまっすぐ進んでいるか、ずれていて軌道修正すべきことはないか、時々チェックしなければなりません。定期的に「祈りの一日」を設けて、ゆっくりと聖書を読み、主の御声に耳を傾け、主の御心を求める時間を作して下さい。それを通して、主はあなたの人生を行くべき道へと導いて下さいます。

3、サウロはなぜ、イエスのことを「ただちに」宣べ伝え始めましたか？

(使9:20)

(解説) サウロは目が見えるようになると、すぐに立ち上がって、イエスを信じてバプテスマを受けました。そして「直ちに」イエスは神の御子であると宣べ伝え始めました。彼は「このことは大切なこと、す

ぐにすべきことだ。遅らせてはいけない」と思ったから、直ちに伝道し始めました。イエスを宣べ伝えることが、彼の緊急かつ最優先事項となったのです。人間は、大事だと思いを優先し、大事ではないと思いを後回しにします。あなたの人生においては、何を最優先にしていますか？仕事？お金？遊び？では、伝道は？・・・・・・「後で」と言うのは、それを大事だと思っていないからです。あなたが「今何をするか」という選択は、あなたの人生の優先順位、価値基準を示しています。私たちは、神の目から見て大切なことを最優先にして、それを「直ちに」実行するようにしましょう。

4、 サウロが弟子たちの仲間に入るために、バルナバはどのようにしましたか？

(使 9:26-28)

(解説) サウロはエルサレム教会で仲間に入ろうとしましたが、皆は最初、彼を信じませんでした。「彼はあの、私たちをいつも迫害していたサウロではないか。私たちを捕らえるために、信者になったふりをしているのではないか」と思って、恐れていました。しかし、バルナバはサウロを信じて、彼を引き受けて、使徒たちの所へ連れて行ってあげました。そしてサウロが主に会って変えられたことを、使徒たちに説明しました。そのおかげで、サウロはエルサレム教会に仲間入りできたのです。サウロはどんなにうれしかったことでしょう。未信者が初めて教会に来たときに、あなたは彼らをどのように迎えていますか？彼らを警戒したり、仲間はずれにしたりしないで、バルナバのように歓迎してあげましょう。新来会者が一人ぼっちにしていたら、彼に積極的に話しかけて、友達になりましょう。牧師先生や他のメンバーにも彼を紹介して下さい。彼がわからないことがあったら、とやかに座って教えて助けてあげましょう。礼拝後も一緒に食事をして「来週もまた会いましょう」と言って下さい。そうするとき、彼はあなたの親切を一生忘れないでしょう。あなたを通して彼はキリストの愛を感じて、続けて教会に来るようになるでしょう。

5、 サウロが危なかったとき、教会の兄弟たちはどのように助けましたか？

(使 9:29, 30)

(解説) サウロがイエスの弟子となって伝道していることを聞いて、ユダヤ人たちは彼を殺そうとしました。彼を裏切り者と思って、憎んだからです。しかし教会の仲間は彼の命を助けて、安全な所へ逃しました。兄弟たちはサウロを連れて、彼の故郷であるタルソへ送り出しました。仲間が危ないとき、大変なときには、彼を助けて、守り、世話をする、それが教会共同体です。伝道、主の働きは、1人の個人プレーではできません。伝道はチームワークです。サウロは、そのことを学ぶ必要がありました。彼は教会の仲間に、どんなに感謝したことでしょう。教会から恩を受けて、彼はいつかその恩を返したいと思ったでしょう。それで彼は後に、この「教会に仕える者」(コロサイ 1:24, 25) となったのです。

6、 教会はどのように前進しましたか？

(使 9:31)

(解説) 教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地にわたり築き上げられて、平安を得ました。彼らは主を恐れ、聖霊に励まされました。だから教会は前進して、信者の数が増えていったのです。以前は迫害者であったサウロが劇的に変えられて伝道する者となったことは、教会全体にとって大きな驚きであり、喜び、励ましとなったでしょう。一人の未信者が信じて人生が変えられる証しは、教会に大きな力を与えます。その一人を見て、既存の信者たちは神のみわざを知り、チャレンジを受けて、共に信仰が成長します。外に出て伝道することが、その教会を内側から変えていき、教会を前進させるのです。

7、主イエスはなぜサウロを選びましたか？

(使 9:15)

(Ⅰ テモテ 1:13, 15, 16) 私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。……「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人かしらです。しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。

(解説) 主イエスがサウロを選んだのは、イエスの御名を「異邦人、王たち、イスラエルの子ら」の前に運ぶため、主の宣教の器、道具として用いるためでした。サウロは以前は迫害する者、「罪人のかしら」でした。しかしそのようなサウロを、主はそのあわれみによって選び、罪から救い、人生を変えて下さったのです。それは、彼が後に未信者たちに伝道するときに、自分自身を「神のあわれみの先例、見本」として証しするためでした。サウロは、自分の体験を通して「自分のような罪人も神のあわれみで救われた。だからあなたも、主によって救われる」と、大胆に伝道することができたのです。「器」というものは、ただの道具であって、使う人がいなくては何の役にも立ちません。しかし、その使い方を知っている人が使えば、その器によって水を汲んだり運んだりすることができます。私たちも「主の選びの器」です。私たちは、神によって選ばれて、神の救いの恵みを他の人々に運ぶために、神に用いられる道具なのです。私たちが選ばれ、救いを受けたのは、実にそのためです。私たちは、自分が主から受けたあわれみと、その救われた目的を忘れないで、主の恵みの福音をいつも証しする者となりましょう。

8、主はなぜあなたを選びましたか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

10章 彼らを受け入れなさい (使徒10章)

まず、使徒の働き10章全部を読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、神はコルネリウスを、どのような人だと思っていましたか？

(使10:1-4)

(解説) コルネウスの祈りと施しは、神の御前に上って、神に覚えられていました。だから神は幻の中で、御使いを通して、彼を呼んだのです。コルネリウスは敬虔な人で、家族全員とともに神を恐れ、民に多くの施しをし、いつも神に祈りをささげていました。神はその全てをいつも見て、覚えていて、それに応えて下さったのです。私たちの祈りや奉仕も、主は覚えていて下さいます。私たちが主を愛して、主のためにしたことを、主は決して忘れません。全部主の天の書物に記録されています。そしていつの日か、主はそれに報いて下さるのです。だから、信仰と希望をもって、主への祈りと奉仕を続けましょう。

2、主の命令に対して「そんなことはできません」と答えることができますか？

(使10:13, 14)

(解説) 主が「ほふって食べなさい」と命令したとき、ペテロは「主よ、そんなことはできません」と答えました。この「主よ」と「できません」という言葉は、両立できない言葉です。神を主、主人とするならば「できません」と言うのはいけません。ただ「はい」と言って従うだけです。もし神に対して「できません」と言うならば、神を主人としないで、自分を主人としているのです。私たちは「主よ」か「できません」かの、どちらかを選んで、どちらかを捨てなければなりません。あなたはどちらを選びますか？……神をあなたの主人としなさい。自分が主ではなく、神だけが自分の人生の主だと宣言して下さい。自分の主人である神に対して「何でもします。どこへでも行きます。どうか使ってください」と告白して下さい。そのときにこそ、主はあなたを自由に用いて下さいます。

3、神がきよめたものを、どのように思わなければなりませんか？

(使10:15)

(使10:28)

(解説) ユダヤ人は、異邦人と交わったり、異邦人を訪問したりすることは、律法で許されていないことだと思っていました。それで、異邦人とつき合いをしないし、食事も共にしませんでした。しかし神はペテロに対して「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない」と言って、どんな人や民族のことでも「きよくない者」とか「汚れた者」とか言うてはならないことを示しました。神は全人類の造

り主であり、全ての民族を愛しています。神の目には、全ての人は尊い価値ある存在です。神はどんな民族でも、どんな国の人々でも、イエス・キリストの十字架の血潮できよめて、受け入れて下さいます。その神が受け入れた人々を「あの人たちは悪い、きたない」などと言って差別したり、嫌ったり、避けたりしてはいけません。他の国や民族の人々、他の宗教出身、教団教派の人々に対して、偏見を持って、さばいてはいけません。神がその人々をきよめて、受け入れて下さるからです。

4、その3人の人を遣わしたのは誰ですか？

(使 10:19, 20)

(解説) コルネリウスからの使者3人をペテロのもとに遣わしたのは、コルネリウスではなく、御霊ご自身でした。だから御霊は「ためらわずに」彼らと一緒にに行くように命じたのです。私たちの所にも、聖霊は時々「受け入れるのがちょっと難しい人」を送って来ます。例えば、考えや習慣、性格が全然違う人、自分と合わなくて、いつもぶつかる人などです。でもその人は「聖霊が送った人」なのです。あなたが他人を愛して受け入れる訓練のために、わざとそのような難しいタイプの人を送って下さったのです。家族や学校、職場で、そのような人と接しなければならないとき、聖霊はあなたにこう言われます。「ためらわずに、彼と一緒に行きなさい。わたしが彼を遣わしたのです。」聖霊ご自身がその人を遣わしたのであれば、それを拒否することはできません。たとえ愛するのが難しくても、「人を愛する訓練」だと思って受け入れて下さい。その人を通して、主はあなたに何か新しいことを学ばせようとしておられるのです。

5、ペテロのことばを聞くために、コルネリウスはどのように待っていましたか？

(使 10:24)

(使 10:33)

(解説) コルネリウスは、親族や親しい友人たちを呼び集めて、ペテロを待っていました。そして、主がペテロに命じた全てのことを伺おうとして、みな神の御前に出ていました。彼らはペテロの言葉を、神からのみことばとして受けとめて、それを待ち望みながら、心を準備していたのです。神のみことばを待ち望む人に、神は語って下さいます。神の御前に出て御声に聞き従おうと準備している人に対して、神はその御心を知らせて下さるのです。準備ができていない人は、たとえ聞いてもわからないし、わかっていても従うことができないでしょう。私たちは礼拝で説教を聞くとき、聖書の学び会するとき、又は一人で聖書を読むとき、どのくらいみことばに期待して、御声を聞こうと心を整えているのでしょうか？みことばを聞くとき「神が今、私に語っているんだ」という感覚があるのでしょうか？神は今もみことばを通して、あるいは説教者を通して、あなたの心に語りかけています。その御声に耳を傾けて下さい。

6、神は民族に対してえこひいきをしますか？

(使 10:34, 35)

(使 10:43)

(I テモテ 2:4) 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。

(解説) 神はえこひいきする方ではなく、どここの国の人であっても、神を恐れ、正義を行う人は、神に受け入れられます。そしてイエス・キリストを信じる者は誰でも、その名によって罪の赦しを受けられるのです。神はどんな民族、どんなグループの人々であっても、愛しておられ、救いたいと願っておられます。それこそが天の父の心です。その心を知る私たちは、どんな民族や宗教の人をも、愛して受け入れるべきです。学歴のない人、貧しい人、障害のある人、自分と違ったグループの人などを、偏見をもって差別したりさばいたりしてはいけません。彼らも皆、主の救いが必要なのです。私たちが受け入れるときに、彼らは主の愛を知るでしょう。

7、異邦人たちは聖霊を受けたとき、誰と同じように受けましたか？

(使 10:47)

(解説) ペテロは「この人たちは、私たちと同じように聖霊を受けた」と言いました。ユダヤ人たちが聖霊を受けたのと全く同じように、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれて、彼らは異言を語り、神を賛美したのです。どんな民族でも、どんな人であっても、私たちが主によって変えられたのと同じように、彼らも変えられます。私たちも以前は、罪で汚れた者であったのに、イエスの血潮できよめられ、聖霊によって、新しい人生へと変えられたのです。だとしたら彼らも、聖霊によって変えられるはずです。どんなに難しい人、かたくなな人であっても、聖霊の力によって変えられます。神にとって「変えることのできない人」などいません。信じますか？そう信じて、信仰によって、忍耐をもって伝道していきましょう。いつの日か必ず、彼らも私たちと同じように、聖霊を受けて変えられる 때가来ます。

8、あなたが受け入れなければならない人は、誰ですか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

11章 関係を築きなさい (使徒11章)

まず、使徒の働き11章19節から30節を読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、ある人々はなぜ、ユダヤ人だけでなく、ギリシア人にも宣べ伝えましたか？

(使11:19, 20)

(解説) 迫害により散らされた人々は、最初はユダヤ人以外の人には誰にもみことばを語りませんでした。ところが、その中の何人かは、アンティオキアに来てからギリシア人にも語りかけ、主イエスの福音を宣べ伝えました。なぜでしょうか？最初彼らは「救われるのはユダヤ人だけだ」と思っていました。でもコルネリウスの回心以後「異邦人も救われるんだ」と信じるようになったので、異邦人にも語り始めたのです。人間は、自分が信じたとおりに行動します。「この人たち、この民族に福音を語っても、彼らは受け入れないだろう」と思っていたら、福音を語らなくなります。しかし、「どんな人、どんな民族でも、このイエス・キリストの福音を聞けば救われるんだ」と堅く信じるなら、どんなに困難があっても福音を語り続けるのです。あなたは、この福音の力を本当に信じていますか？信じているなら、そのように行動しましょう。あなたの信仰の通りになりますように。

2、アンティオキア教会は、最初に誰が開拓しましたか？

(使11:20, 21)

(解説) ステパノのことから起こった迫害により散らされた人々の中に、キプロス人とクレネ人が何人かいて、彼らが福音を宣べ伝えました。そして「主の御手が彼らとともにあったので」大勢の人が信じて主に立ち返り、それでアンティオキア教会が始まりました。バルナバでもパウロでもありません。聖書の中に名前の書かれていない、全く無名の普通の信者たちが、あの有名なアンティオキア教会を開拓したのです。今でもある人たちは「自分は一般信徒だから、教会開拓はできない。牧師や教職者がいないと教会はできない」と信じ込んでいます。実際には、そんなことは全くありません。一般信徒でも、女性でも、子どもでも、イエス様を信じたばかりの人でも、信者であればどんな人であっても、教会を開拓することができます。必要なのは、牧師資格でも神学校卒業証書でも教団の許可証でもありません。「主の御手が共にあること」です。主の御手が共にあれば、その人によって大勢の人が信じて主に立ち返るのです。信じますか？他人の声を恐れてはなりません。主イエスがあなたに教会を開拓する資格を与えたのです。私たちは全て「王である祭司、主にある働き人、御国の宣教者」なのです。

3、バルナバは、どのような人でしたか？

(使11:22-24)

(解説) アンティオキアで大勢の人が信じるようになったという知らせを聞いたエルサレム教会は、バルナバをアンティオキアに派遣しました。バルナバは教会から「この人ならこの任務を任せても大丈夫だ」と信頼されていました。だから彼が選ばれて、教会の代表として派遣されたのです。彼は第1に「人々から信頼される人」でした。第2には「神の恵みを見て喜ぶ人」でした。同じ1つの教会の状況を見ても「これは大変だ」と言う人もいれば、「これは恵みだ」と喜ぶ人もいます。同じものを見ている、反応が違うことがあるのです。バルナバはどんな状況の中にあっても、その中に神の恵みを見つけて、それを喜ぶことができる人でした。第3に彼は「励ます人」でした。バルナバは、アンティオキア教会のみなが心を堅く保って、いつも主にとどまっているようにと励ましました。彼は教会が聖霊の火で燃えているときに、それに油を注いで、さらにもっと燃え上がるようにしたのです。私たちは、人が燃えているときに水をかけて消すような「消防士」であってははいけません。バルナバのように教会を励まして、共に燃えるようにしましょう。第4は「立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人」でした。彼は人格的にも霊的にも、成熟した人物だったのです。なので彼によって「大勢の人たちが主に導かれ」ました。伝道や宣教の働きは、ただのテクニックではありません。それはその人の人格的成熟から流れて出て来る結果なのです。

4、バルナバはなぜ、サウロを捜して連れて来ましたか？

(使 11:25, 26)

(解説) バルナバは、サウロのことを忘れてはいませんでした。サウロがダマスコやエルサレムで情熱をもって伝道していたこと、彼の賜物、可能性を見て、よく覚えていました。それでバルナバは、わざわざサウロの故郷であるタルソまで行って捜し出して、彼に「一緒にやろうよ！」と言って、アンティオキアまで連れて行ったのです。バルナバは「人のかくれた才能を引き出す人」でした。バルナバはきっと一人でもできたでしょう。でも、一人でやることを望まなかったのです。彼は共に働くことを望みました。チームワークこそが力です。「 $1 + 1 = 2$ 」ではなく、10にでも100にでもなるのです！バルナバとサウロは、まる1年の間、共に働いて、教会で大勢の人たちを教えました。サウロはどんなにうれしかったでしょう！彼は「主よ、こんな私を再び用いて下さるのですか」という感激と喜びをもって、主と教会に仕えたことでしょう。バルナバの助手、見習いとして、共に労苦しながら、伝道と牧会を体験したでしょう。これによって、サウロは人格的に成長し、主の働き人として整えられていったのです。

5、弟子たちは何にに応じて、救援の物を送りましたか？

(使 11:29)

(解説) アンティオキア教会の弟子たちは「それぞれの力に応じて」ユダヤの兄弟たちに救援の物を送ることに決めました。自分の持っている財力によって、それ以上でも以下でもなく、自分から進んでさげたのです。献金とは、多いか少ないかではありません。人の目を気にして、申し訳ないからするものでも

ありません。税金のように強制されて義務的にするものでもありません。献金とは、神を愛するからするのです。「神の御心を行いたい」という情熱をもって主にささげるものです。「いくらささげるのか？」は、御声をよく聞いて、聖霊の導きに従って、自分で決めて下さい。あなたの信仰の分量に応じて、自由な心でささげて下さい。主はあなたのその心を受け取って下さいます。

6、エルサレム教会とアンティオキア教会は、どのような関係でしたか？

(使 11:27-30)

(解説) エルサレム教会は母教会として、アンティオキア教会に預言者たちを派遣し、彼らを励まし、みことばを教え、霊的に指導しました。アンティオキア教会はエルサレム教会の長老たちに対して、救援物資を送り、献金して、彼らに敬意と感謝を表しました。これが、教会の美しい関係です。遠く離れていても、お互いに助け合い、支え合い、コミュニケーションを保ったのです。これこそが、キリストのからだです。器官は色々でも、からだは1つです。キリストにある兄弟姉妹が1つになって、美しい関係を築くとき、主のすばらしさが世界に示されるのです。

7、あなたは他の信者たちと、どのような関係を築きますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

1 2 章 教会の逆転勝利 (使徒 1 2 章)

まず、使徒の働き 12 章全部を読みましょう。その後で、以下の質問に答えて下さい。

1、ヘロデ王はなぜ、ペテロをも捕らえましたか？

(使 12:1-4)

(解説) ヘロデ王は、ヤコブを殺したのがユダヤ人に喜ばれたのを見て、さらにペテロも捕らえました。つまり、人々に気に入られようとして、人気を取ろうとしたので、ペテロも殺そうとしたのです。「周りの人々が自分のことをどう思うか」を基準として自分の行動を決めようとする、間違っただけでも平気でやるようになります。他人の評価というのは、いつも変わります。それを気にしていると、いつも不安になり、周りの目に縛られるようになります。「周りの人々全員を満足させる」というのは、到底無理

なことです。私たちは「周りの人がどう思うか」ではなくて「神様はどう思うか」を基準として判断すべきです。神の御心にかなって行動するなら、他人の目を恐れることなく、大胆に、正しく生きることができるのです。

2、教会はペテロのために、どのようにしましたか？

(使 12:5)

(解説) 教会は、自分たちの指導者ペテロが捕らえられ、殺されそうになっているのを知って、彼が助かるように、熱心な祈りをささげ続けました。柱である指導者がやられると、教会全体が倒れてしまいます。だからサタンは教会の指導者を集中攻撃するのです。指導者は多くの困難にぶつかります。だからこそ教会のメンバーはみな、指導者のために熱心に祈らなければなりません。教会員にとって牧師とは、批判する対象ではなく、祈って守るべき対象なのです。牧師のための「とりなし祈りチーム」が必要です。牧師の霊性のために、健康と安全のために、家族関係のために、経済的必要のために、教会員や他教会との関係のために、失望、落胆、誘惑、迷い、あらゆる妨害から守られるように……。祈るべきことはたくさんあります。教会員たちが牧師のために祈るときこそ、牧師はサタンの攻撃から守られ、主の群れを正しく導くことができるのです。

3、彼らはなぜ、召使いロデの言葉を信じませんでしたか？

(使 12:15)

(I ヨハネ 5:14, 15) 何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。私たちの願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。

(解説) 教会の人たちはみな、ペテロが助かるように熱心に祈っていましたが、まさかペテロが本当に助け出されるとは信じていませんでした。だから召使いのロデが「ペテロが帰って来て今家の門の前に立っている！」と言っても、人々は全く受け入れないで「あなたは気が変になっている」と言いました。祈ってはいたけど「奇跡が起こるなんてありえない」と思っていたいのです。だから、実際に祈りが応えられても、わからなかったのです。私たちは祈っているとき、そのことが本当になえられると信じているでしょうか？ 祈るなら、それが応えられると信じて、期待して祈るべきです。神の御心にかなった祈りは、必ず聞かれるのです！

4、民衆はなぜ、ヘロデ王の声を神の声だと叫び続けましたか？

(使 12:20-22)

(箴言 29:25, 26) 人を恐れると罾にかかる。しかし主に信頼する者は高い所にかくまわれる。支配者の顔色をうかがう者は多い。しかし、人をさばくのは主である。

(解説) ツロとシドンの人々は、ヘロデ王が自分たちに対してひどく腹を立てているのを知って、彼を訪ねて和解を願い出ました。その地方は王の国から食糧を得ていたの、王の好意を得たかったのです。それでヘロデ王が演説したときに「神の声だ。人間の声ではない！」と叫び続けました。では、彼らはヘロデ王の声が神の声だと、本気で思っていたのでしょうか？いいえ、彼らは王を恐れて、王の顔色をうかがって、ウソをついたのです。神の声だとはちっとも思っていないのに、王に気に入られなくて、口先だけでほめて、そう言ったのです。支配者、権威者をむやみに怖がって、その顔色をいつもうかがっていると、黒いものも白だと言うようになります。ある組織の中で利益を得ていると、その組織のリーダーが悪い事をしていても、それに対して黙ってしまうことが、よくあるのです。人を恐れると罠にかかります。人をさばくのは主です。私たちは、神だけを恐れて、主の公正なさばきを信頼して、正直に生きていきましょう。

5、ヘロデ王はなぜ、主の使いに打たれましたか？

(使 12:23)

(解説) ヘロデが神に栄光を帰さなかったの、彼は即座に主の使いに打たれて、虫に食われて死にました。「これは自分がやったんだ、私は偉いんだ、優秀だ、自分の力でできる」と思う傲慢な者は、主に打たれます。私たちはこの「傲慢虫」に食われないように注意すべきです。私たちは「これは神が全て成して下さった、全部主の恵みだ、主に感謝して、主に栄光をお返しします」と言わなければなりません。いつも主の力に拠り頼み、何かうまくいったら、すぐに主に栄光を帰する習慣をつけて下さい。謙遜な人を、主は長く用いて下さいます。

6、神のことばは、なぜ盛んになり、広まっていきましたか？

(使 12:24)

(解説) 指導者ペテロが御使いによって奇跡的に救出され、迫害者ヘロデ王が神に打たれたのを見て、教会の信者たちはどんなに驚き、喜び、主に感謝をささげたことでしょうか。彼らは祈るときに、奇跡的な勝利を体験したのです。彼らの信仰はますます成長して、ますます大胆に伝道するようになったでしょう。だから神のことばはますます盛んになり、広まっていたのです。これは教会の「逆転勝利」です。教会は、神の方法で勝利します。迫害でさえも、宣教の前進へと変えてしまいます。サタンがどんなに攻撃をしても、主の教会に打ち勝つことはできないのです。

7、あなたの教会は困難があるとき、どのようにしますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

13章 聖霊によって宣教しなさい (使徒13章)

1、アンティオキア教会の人々はなぜ、断食をしましたか？

(使 13:2, 3)

(解説) アンティオキア教会の人たちが礼拝し断食していると、聖霊の御声を聞きました。そこで彼らは、続けて断食して祈り、その命令に従ってバルナバとサウロを送り出しました。彼らが礼拝して断食の祈りをするのは、主の御声、命令を聞いて、それに従うためでした。それこそが、礼拝と断食の理由であり、目的だったのです。私たちはなぜ礼拝し、断食祈りをしますか？自分の願いをかなえるため？力や励ましを得るため？もっと霊的になりたいから？ただの習慣？他の人がやっているから？……いいえ、それは正しい理由、動機ではありません。礼拝と断食の目的は、主と出会うため、主の御声を聞き、それに従うためです。「主よ、お話しください。しもべは聞いております」(Iサムエル 3:9, 10) という心で礼拝し、断食祈りをして下さい。そのような態度で準備ができている人に、主は語って下さいます。

2、誰がバルナバとサウロを召しましたか？

(使 13:2)

(解説) 聖霊が直接、バルナバとサウロを選んで、主の働きへと召しました。自分でも他人でもなく、教会の会議でも組織でもありませんでした。二人を召して派遣したのは、聖霊ご自身なのです。主が召して立たせた人を、他の人がとやかく文句を付けてはいけません。それは、その人を召した主を批判するのと同じことです。私たちは主を恐れるべきです。また、召された本人も、恐れをもって、主の任務につくべきです。「これは自分からではなく、主が私を任命したのだ」という確信、召命感を持って、主の働きに就いて下さい。

3、アンティオキア教会は、バルナバとサウロをどのように送り出しましたか？

(使 13:3)

(解説) 彼らは、二人の上に手を置いてから、送り出しました。手を置く、按手するというのは、委ねる、任せるといことです。つまり「本来は私たちがやるべき宣教の任務を、あなたたちが代わりにやるのです。私たちの代表として派遣します」という意味なのです。宣教とは、宣教師だけ、一部の特殊な人たちだけでやるものではありません。宣教は全教会の任務です。宣教は、行く人だけではできません。送り出す人、祈って支える人が必要なのです。「行く」か「送る」か、どちらかを選んで下さい。あなたは宣教師として召されていますか？それなら、ためらわず行って下さい。もしそうでないとしたら、あなたは「送り出す」という任務に召されているのです。その召しに従って、宣教を自分の任務と自覚して、しっ

かり責任を持って、宣教者のために祈り、支え続けて下さい。行く者と送る者が一つになるとき、主の宣教が前進するのです。

4、ユダヤ人たちが反対したとき、パウロはどのように反応しましたか？

(使 13:45-47)

(使 13:50, 51)

(マタイ 10:14) だれかがあなたがたを受け入れず、あなたがたのことばに耳を傾けないなら、その家や町を出て行くときに足のちりを払い落としなさい。

(解説) パウロたちが宣教して町中の人々が集まって来たとき、ユダヤ人たちはねたみに燃え、パウロの語ることに反対して、口汚くののしりました。そして町のおもだった人たちを扇動して迫害させ、二人を追い出していました。しかし二人は「これからは異邦人の方に向かいます」とはっきり宣言して、彼らに対して足のちりを払い落して、他の町へ行きました。以前イエス様が命じた通りに、二人はそうしたのです。私たちが伝道して、その人がたとえ受け入れなくても、がっかりしてはいけません。福音を受け入れるかは、その人の責任です。私たちの責任は、福音を伝えて、祈り、後は主に委ねることです。あなたの責任を果たした上で、その人が拒否するのだったら、次の人に行けば良いのです。福音を待っている人は、他にも沢山いるのですから。

5、どのような人たちが、信仰に入りましたか？

(使 13:48)

(解説) 「永遠のいのちにあずかるように定められていた人たちはみな」信仰に入りました。伝道とは、神が備えて置いた人を探すことです。しかし私たちには、誰が神に備えられた人か分からないから、全員に伝えるのです。真理を求めて飢え渴いている人、苦しみの中で救いを求めている人、最初から福音に心が開かれて、歓迎する人……。どの町にも必ず、そのような人「平安の子」がいます。伝道とは、宝探しのようなものです。門が開いている所から入って下さい。閉じている門を無理やり開けようとしなくても良いのです。全ての人に伝道しているうちに、主が必ず出会わせて下さいます。

6、弟子たちはなぜ、喜びと聖霊に満たされていましたか？

(使 13:52)

(解説) 自分たちを教えてくれた先生方二人は、迫害されて追い出されてしまいました。普通だったら、悲しみと失望で満たされていることでしょう。しかし、彼らはそうだったのでしょうか？いいえ！彼らは何と「喜びと聖霊に満たされていた」のです！！なぜでしょうか？それは、彼らが福音を聞いて、救いの確信と喜びにあふれていたからです。そして先生たちがいなくても、聖霊様がいつも共にいる、というこ

とをはっきり信じたからです。人間や先生に依存している人は、その人がいなくなると信仰がダウンします。しかし、救いの喜びに満たされて主にしっかりとつながり、聖霊に依存して抛り頼んでいる人は、むしろ信仰が成長します。後になって、この地域には教会が沢山生まれました。だから「宣教は大変だ」とばかり言わないで下さい。宣教とは「聖霊による喜び」です。それは、どんな迫害も乗り越える、超自然的な喜びなのです。

7、あなたが宣教するときには、何が必要ですか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

1 4 章 あなたを通して神がなされる (使徒 1 4 章)

1、主は何のために、彼らにしるしと不思議を行わせましたか？

(使 14:3) 主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた。

(マルコ 16:20) 弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた。

(解説) しるしと不思議は、みことばを証しするためのものでした。福音伝道するときに、主が共に働いて奇跡を起こし、その教えが確かなものであることを証明したのです。ですから、奇跡やいやしは、自分の利益のためではありません。人に見せて驚かせるためでもありません。奇跡の目的は、それによって人々がイエス・キリストを信じるためです。私たちは伝道するときに、もっと奇跡やいやしが起こるように祈りましょう。そしてその奇跡によって未信者たちがイエス様を信じるように祈りましょう。主はあなたと共に働いて、神の力を示して下さいます。

2、この足の不自由な人には、どのような信仰がありましたか？

(使 14:9)

(解説) パウロはこの足の不自由な人をじっと見つめ、彼にいやされるにふさわしい信仰があるのを見ました。奇跡やいやしは、神がなさるものです。しかし、神は私たちと共に、私たちの信仰を通して働き

ます。この信仰は、いやしを祈る人にも必要ですが、祈ってもらう側の人にも「いやされるにふさわしい信仰」が必要なのです。祈る人は「私を通して神がなされる」という信仰を持って祈り、祈られる人も「神は私をいやすことができる方だ」と信じるときに、神は奇跡的ないやしのわざを示して下さいます。神は私たちの信仰を見えています。私たちは神の同労者です。パウロが大声で「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言うと、彼は飛び上がって歩き出しました。私たちは全能の神の力をもっと信頼して、信仰を持って「イエス様の御名によっていやされよ！」と大胆に宣言しましょう。

3、使徒たちはなぜ、群衆がいけにえをささげるのをやめさせましたか？

(使 14:14-18)

(解説) 人間は神(創造主)ではありません。創造主でないもの(人間、先祖、動物、自然、石や金で作った物など)を拝んでいけにえをささげるのは、全て偶像崇拜の罪です。キリストは花婿で、私たちはその花嫁です。妻がどんなに家事を良くやっても、他の男と付き合っていたら、その夫はどう思うでしょうか？激しく怒るに違いありません。私たちは「天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた生ける神」だけを礼拝しましょう。

4、パウロはなぜ、以前石打ちにあった所に引き返しましたか？

(使 14:19-22)

(解説) リステラでパウロは、ユダヤ人から石打ちに遭い、死んだようになりました。しかし彼は立ち上がって町に入り、翌日にデルベに行きました。しかしその後彼はもう一度、リステラに引き返しました。迫害されて、石で打ち殺されそうになったような危険な所に帰りたい人が、一体いるのでしょうか？でも、パウロは引き返しました。なぜですか？それは「弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧め」るためでした。彼は自分の命よりも、主の宣教の働き、弟子たちの信仰成長を助けることの方が、もっと大切だと考えたのです。何という使命感でしょう！「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない。」・・・そうです。主の道には、苦しみがあります。しかし、この神の国の働きには、その苦しみよりももっと大きな価値があるのです。だから、私たちはあきらめてはいけません。この働きをやめて、後ろに退いてはいけません。苦しみに負けず、前進し続けて行きましょう！

5、使徒たちはその場所を去る前に、教会のために何をしましたか？

(使 14:23)

(解説) 使徒たちは教会ごとに長老たちを選び、断食して祈って後、その教会を主に委ねました。自分たちが離れた後も、その立てられた長老、リーダーたちがいるので、彼らが続けて教会を導きました。だから教会は自立して、弟子養育の働きを継続し、教会は増殖していくことができたのです。いつまでも牧師

や教職者に依存している教会は、無牧になったら何もできなくなります。だからこそ弟子作り、リーダー育成が大切なのです。宣教者は教会員を自分に依存させるのではなく、主に直接つなげて、彼らが自立できるように育て、自分は去って次の任地に行くべきです。そうするときに、教会が教会を次々と生み出していけるのです。これこそがパウロの方法、初代教会の方法、聖書の方法、神の方法なのです。

6、使徒たちはアンティオキア教会に帰った後、どのようにしましたか？

(使 14:26-28)

(解説) パウロとバルナバは、以前送り出されたアンティオキア教会に着くと、教会の人々を集め「神が自分たちとともにいて行われたすべてのこと」を報告しました。宣教報告とは「自分はこんなにやったんだ」というのを自慢することではありません。「私たちを通して神がなされたこと」を謙遜に報告して、神に栄光をお返しするときなのです。そうするときに、聞く人も「ああ神は、私たちの祈りにこんなにも応えて下さったのか」と言って、神を賛美するようになるでしょう。なので、宣教報告はとても大切です。これによって行く者と送り出す者が一つになり、主のみわざの栄光が現されるのです。

7、神はあなたを通して、どのようなことをなして下さいましたか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

15章 あの人たちも同じなのです (使徒15章)

1、ユダヤから下って来たある人々は、どのように教えていましたか？

(使 15:1)

(使 15:5)

(解説) ユダヤから下って来たある人々は「割礼を受けなければ救われない」と教えていました。パリサイ派の者で信者になった人たちも「異邦人にも割礼を受けさせ、律法を守るように命じるべきである」と主張しました。今日においても、このような「パリサイ派クリスチャン」が多くいます。彼らは「～しなければ救われない」と言います。まず自分で基準を設定した上で「私は良いクリスチャンだ」と思って自

分の義を主張します。次にはその自分の基準をもって、「あの人は悪い」「～させるべきだ」と言って、他の人をさばくのです。神の律法は良いものです。しかし「パリサイ的律法主義」は、自分にも教会にも問題をもたらします。私たちはいつも、自分の信仰生活の中にこのような「パリサイ的傾向」がないかどうか、良くチェックしなければなりません。

2、この問題を解決するために、どのようにしましたか？

(使 15:2)

(使 15:6)

(解説) ユダヤ人パリサイ派信者と、パウロたちの間に激しい対立と論争が生じたとき、この問題について話し合うために、パウロたちはエルサレム教会に行きました。そこで使徒たちと長老たちは集まって会議を開き、この問題について協議しました。対立が生じたとき、彼らは自分たちだけで解決しようとしませんでした。分裂して分派を作ったりもしませんでした。しかたがなく我慢したり、陰で悪口を言ったりもしませんでした。彼らはその問題を教会のリーダーに相談して、問題をオープンにし、当事者と直接堂々と話し合う場を設けたのです。これこそが正しい解決方法です。これなら、両方がすっきりします。知恵のあるリーダーは、問題を全体的、長期的な視野で見ます。リーダーたちと話し合うときに、より賢い、よりふさわしいやり方で問題を解決へと導き、主の御心に近づくことができるのです。

3、神はユダヤ人と異邦人とを差別しますか？

(使 15:8, 9)

(解説) 神はユダヤ人信者に聖霊を与えたのと同じように、異邦人信者にも聖霊を与えました。ユダヤ人と異邦人とに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめて下さいました。神は民族によって人間を差別しません。どんな民族の人であっても、イエス・キリストを信じる信仰によって、心をきよめて下さいます。神は公平な方です。だから私たちも、民族やグループによって人を差別してはいけません。「あの人は～人だから……」という偏見や先入観を持ってさばいてはいけません。人を民族や住む地域、職業、所属団体、教団教派などによってひとまとめに判断するのではなく、一人一人の心、たましいを見ましょう。神が公平な方であるように、私たちも公平な心を持ちましょう。

4、ユダヤ人とその先祖たちは、モーセの律法を守ることができましたか？

(使 15:10)

(ヨハネ 8:7) 「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。」

(解説) ユダヤ人は、先祖たちも自分たちも、モーセの律法を守ることができませんでした。それなのに、自分も負いきれなかった「くびき」を異邦人信者たちの首に掛けて、「彼らも律法を守るべきだ」と言っ

ているのです。これは実に、神を試みる罪です。自分が神のさばきの座に着こうとするのと同じです。自分もできないくせに、他人に言うてはいけません。自分にも悪い所があるのに「あの人は悪い」と批判すべきではありません。イエス様も、姦淫の現場で捕らえられた女を石打ちにせよと言っているパリサイ人たちに対して「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい」と言いました。私たちのうちで、石を投げられる者、他人を罪に定める資格がある者は、一人もいません。人をさばくのは、神様ただおひとりです。

5、 私たちも「あの人たち」もみな、何によって救われましたか？

(使 15:11)

(解説) ユダヤ人も、ただ「主イエスの恵みによって」救われました。だとしたら、「あの人たち」異邦人もそうなのです。彼らも主の恵みによって救われました。「こうしないと救われない」などと言って、色々な他の条件をつけてはいけません。ただ恵みのみ、それだけです。他にはありません。私たちだって罪だらけにもかかわらず、ただ主の十字架の恵みによって赦されているではありませんか。あなたは、自分がただ主イエスの恵みによって救われたことを信じますか？だとしたら、「あの人たち」も同じなのです。クリスチャンらしくない人、自分よりも悪く見える人、ケンカして赦せない人、性格や習慣が違う人、グループが違う人……。みんな、主の恵みによって救われました。「あの人たちも同じなのです。」私たちは十字架の赦しの恵みを仰ぎ見るときにのみ、他人を受け入れることができるのです。

6、 ヤコブはなぜ、避けるべきことを書き送るように言いましたか？

(使 15:19-21)

(ローマ 14:20, 21) 食べ物のために神のみわざを台無しにしてはいけません。すべての食べ物はきよいのです。しかし、それを食べて人につまずきを与えるような者にとっては、悪いものなのです。肉を食べず、ぶどう酒を飲まず、あなたの兄弟がつまずくようなことをしないのは良いことです。

(I コリント 10 : 32, 33) ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、つまずきを与えない者になささい。私も、人々が救われるために、自分の利益ではなく多くの人々の利益を求め、すべてのことですべての人を喜ばせようと努めているのです。

(解説) モーセの律法では、偶像に供えて汚れたものや絞め殺したもの、血を食べないこと、また淫らな行いを避けることが定められています。ユダヤ人の間では、昔から町ごとに会堂があつて、安息日ごとにその律法が読まれています。なので、ユダヤ人たちはそのようなことをやりませんでした。それなのに、もし異邦人で信者になった人が、そのようなことを教会のユダヤ人信者の前で行ったらどうでしょうか？ユダヤ人はその異邦人信者を見て「彼らは神を信じたのに、なぜあんなことをするのか？」と思って、人をさばく心を起こすようになるでしょう。だからヤコブ(イエスの弟で、エルサレム教会の指導者、ヤコブの手紙を書いた。十二使徒のヤコブではない)は、教会全体の一致のために、そのように手紙を書き送るべきだと言ったのです。今日でも、このようなことに当てはまる事例が沢山あります。例えば酒を

飲むこと、タバコを吸うこと、などがそれです。酒を飲むこと、タバコを吸うことは、神の前に罪であって、すべきではないと、私は信じます。しかしこれは「それをするならあなたは救われない」と言ってさばくことではありません。それでも、その行為を見て他の信者が良く思わないのなら、その人のために、その行為をやめるべきです。教会の他の兄弟姉妹につまずきになるようなことは、たとえ自分がそれをしたいと思っても、避けるべきです。その人が嫌がることは、その人の前では、してはいけません。自分のためではなく、相手のために自制するのです。これが教会内での人間関係のルールです。

7、自分と違う種類の人たちを、あなたはどのように受け入れますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

16章 牢獄の中で賛美しなさい (使徒16章)

1、パウロとバルナバは、なぜ別行動をとることになりましたか？

(使 15:36-41)

(解説) 第2次宣教旅行に行くのに、バルナバはマルコを一緒に連れて行くつもりでした。しかしパウロは、前回の旅行のとき途中で一行から離れてしまったような者は、連れて行かないほうがよいと考えました。こうして激しい議論になり、その結果、パウロとバルナバは互いに別行動をとることになりました。バルナバはマルコを連れてキプロスに行き、パウロはシラスを選んで出発しました。バルナバの気持ちも理解できるけど、パウロの意見ももっともです。どちらかが正しくてどちらかが間違っている、というわけではありません。観点が違うだけです。しかし、両者の意見は一致することなく、チームは分裂してしまいました。しかしこのようなことは、宣教する中で、よく起きることなのです。分裂は、心傷つき、落胆し、悲しいことです。喜んで分裂する人は誰もいません。できることなら、私たちは分裂しないで、チームが一致して行動したいものです。しかし、このような心の痛い出来事をも、神は益と変えて下さり、宣教の拡大のために用いて下さいます。そのときはなぜか分からなくても、ずっと後になって「あのことは全て神の御手の中にあったのだ」と告白することでしょう。その日が来るのを信じて、あきらめずに宣教を前進させて下さい。

2、聖霊はなぜ、みことばを語ることを禁じましたか？

(使 16:6-8)

(解説) パウロは、アジア（今のトルコ西部地方のこと。今で言う中国や東南アジアのことではない）でみことばを語ろうとしました。そうしたら、聖霊がそれを禁じました。それで、他の地方に行きました。そして今度はビティニアに進もうとしましたが、またもやイエスの御霊がそれを許しませんでした。パウロはきっこう思ったに違いありません。「なぜダメなんだ。みことばを語って宣教することは主の御心にかなうことなのに、どうして聖霊はそれを禁じるのだろう。私が何か間違っているのだろうか。全く理解できない。」私たちは宣教していると、時々こういう状況にぶつかることがあります。なぜこうなるのか、全くわからない。でも、頭で理解できないけど、主がそうなさるなら、とにかく従う、それが従順です。聖霊が禁じるのですから、そうするしかありません。そういうときがあるのです。その時はわからなくても、後でわかる時が来ます。だから、今すぐわからなくてもいいのです。そういうときは、神の時が来るまで、じっと待つのです。「STOP」と言われたら、その場で止まり、「GO」と言われたら行く。それだけです。神は、今私たちが知らない、何かもっと大きな計画を持っておられるのです。だから、神の最善の導きを信頼して、そこにとどまりつつ、神の時を待ちましょう。

3、その幻を見たとき、パウロはどのようにしましたか？

(使 16:9, 10)

(解説) 「マケドニアに渡って来て、私たちに助けてください」と懇願する幻を見たとき、パウロは「ただちに」渡ることになりました。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が召しておられるのだと確信したからです。ついに GO サインが出ました。神の御心を知って確信したのなら、もうぐずぐずしてはいけません。ためらうことなく、直ちに行動に移すべきです。宣教は GO と STOP のくり返しです。聖霊の御声を聞きながら、その導きに敏感に従って行って下さい。主は私たちを、昼は雲の柱、夜は火の柱で、御心の地へと導いて下さいます。

4、パウロが語ったとき、主はリディアの心をどのようにされましたか？

(使 16:13-15)

(解説) パウロがピリピの祈り場で語っていた時、主はリディアの心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにしました。そして彼女とその家族はバプテスマを受け、それからパウロたちを自分の家に泊めさせました。このリディアの家は、後に家の教会となって、ピリピ教会の始まりとなったのです。全く教会がないような地に宣教するとき、神は必ずこのような人を備えて下さいます。福音に心を開いて、飢え渇きがあって、家族そろって伝道者を歓迎する、そういう人です。このような人のことを「平安の子」と言います (ルカ 10:6, 7)。宣教地に行ったら、まずこのような平安の子を探して下さい。そしてその家にとどまりなさい。他の家をあちこち渡り歩いてはいけません。そうすれば、その家族が町の中で私たちの保証人となって、他の人に説明してくれます。そして後にそこが家の教会となるのです。これがイエス様の宣教戦略であり、パウロの宣教戦略なのです。

5、パウロはその占いの霊に対して、何と言いましたか？

(使 16:16-18)

(解説) パウロはその女に取りついていた占いの霊に対して「イエス・キリストの名によっておまえに命じる。この女から出て行け」と言いました。すると、ただちに霊は出て行きました。私たちは悪霊に対して「どうか出て行って下さい」とお願いするする必要はありません。イエス・キリストの御名の權威によって「命令」するのです。イエス様は天と地の全ての權威を持つ神の御子で、私たちはキリストの大使です。私たちの方が、悪霊よりもずっと強いのです。だから、サタンにだまされてはいけません。悪霊を怖がる必要は全くありません。サタンは私たちが宣教するのを嫌がって、色々な方法で妨害してきます。宣教に妨害があるのは当たり前だと思って下さい。その妨害する悪霊に対して、声を出して「イエス様の御名によって出て行け」と命令しなさい。その場所に、イエス・キリストの御国の支配を宣言しなさい。そのときに、主が勝利を与えて下さいます。

6、牢獄の中にいたとき、パウロたちはなぜ賛美しましたか？

(使 16:22-25)

(解説) パウロとシラスは捕らえられ、むちで何度も打たれて、牢に入れられ、足には足かせがはめられました。普通だったら、どう思うでしょうか？悲しみ、落胆、絶望、不安、「神よどうして…」と不平不満を言うでしょう。しかし、パウロたちはどうしましたか？彼らはこのような状況の中で、真夜中に祈りつつ、神を賛美する歌を歌っていたのです！なぜそのようにできたのでしょうか？神が全ての状況を支配しておられ、全てを益として下さることを信じていたからです。そして神は必ず奇跡をなして、助け出して下さると確信して、信仰によって事前に感謝し、祈り、賛美していたのです。彼らは、たとえ状況がうまくいなくても、信仰によって、獄中で賛美したのです。これは、状況を超越した信仰です。神はそのような信仰に答えて下さいます。他の囚人たちは、彼らの賛美に聞き入っていました。今も世の人たちは、私たちを見えています。大変なとき、私たちがどう言うのか、耳をそば立てて聞き入っているのです。私たちは牢獄のような八方ふさがりの中で、真夜中で真っ暗な状況に見えるときに、信仰によってこう告白しましょう。「神はこれを益として下さると信じて、感謝し賛美します！」

7、看守が主イエスを信じたとき、彼の全家族はどうなりましたか？

(使 16:31-34)

(解説) パウロは「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言いました。その約束の通り、看守とその家の者全員は、イエスを信じてバプテスマを受けました。それからパウロたちを家に案内して食事のもてなしをし、神を信じたことを全家族と共に心から喜びました。あな

たが主イエスを信じる時、あなた一人だけが救われるのではありません。あなたを通して、あなたの父、母、兄弟姉妹、息子、娘、親戚みんなが救われていくのです。信じますか？このみことばの約束を握って、信仰をもって祈り続けて下さい。あなたの生活を通して証しして下さい。家族はあなたが主イエスを信じてどう変わるのか、関心を持ってじっと見えています。家族みんなと一緒に天国に行きたいではありませんか！家族の救いは、あなただけの願いではなく、主の願いなのです。家族の救い、また子どもたちの信仰継承のために、あきらめずに祈り続けましょう。全家族そろって神を信じて喜び賛美する日が、必ず来ます。

8、あなたは状況がうまくいかないとき、どのようにしますか？

（解説）最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

17章 神を知らない人たちに宣べ伝えなさい（使徒17章）

1、ベレアのユダヤ人たちはなぜ、信じましたか？

（使17:11,12）

（ヤコブ1:21）ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。

（解説）ベレア町のユダヤ人は素直で、非常に熱心にみことばを受け入れました。そしてパウロの説教したのを聞いたとき、はたして本当にそのとおりかどうか、毎日聖書を調べました。なので、彼らのうちの多くの人たちが信じました。私たちは聖書を読むとき、どのような心で読みますか？聖書を「神のみことば」として素直に受け入れる心、信じようとする開かれた心、熱心に真理を追求する心で読むなら、必ず主に出会えます。そして主イエスを信じるようになります。聖書のみことばは、たましいを救う力です。伝道するときに、人間的な良い言葉だけで語らないで下さい。聖書の箇所を開いて、そのまま読んで聞かせて下さい。聖霊は、ご自身のみことばを通して働くのです。そして、他の人の教えを聞いたら、果たして本当にそのとおりかどうか、聖書を開いて一つ一つ調べる習慣を身に付けて下さい。それがもし聖書全体に合わない、聖書箇所に根拠がない教えだったら、それを受け入れてはいけません。聖書こそが真理を判断する絶対的基準です。聖書のみことばを生活の土台とするときに、その人の信仰は堅く立つようになるのです。

2、パウロはアテネでなぜ、心に憤りを覚えましたか？

(使 17:16)

(解説) パウロは、アテネの町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを覚えました。彼はその町を、神の視点、神の心で見たのです。天地の造り主である唯一の神様は、町が偶像でいっぱい、人々がそれらを拝んでいるのを見て、どう思うでしょうか？まことの神を知らずに、偽りの神々に縛られている人々を見て、どんなに悲しむでしょう。そして人々を惑わしてご自身から離れさせる偶像を見て、非常に憤るにちがいありません。パウロは、その神の心を自分の心としたのです。これは聖なる憤り、「義憤」です。私たちは、周りが未信者ばかりの社会に住んでいると、偶像に見慣れてしまって、そのような霊的感覚を失ってしまうことがあります。あなたの町には、偶像がたくさんありますか？私たちは偶像を見るとき、その背後にいる悪霊を追い出し、偶像崇拜に縛られている失われたたましいを見て、かわいそうに思い、彼らの救いのためにとりなして祈るようにしましょう。

3、パウロはアテネの人たちに、どのように語りかけましたか？

(使 17:22, 23)

(使 17 : 28)

(解説) パウロはアテネの人たちを「あらゆる点で宗教心にあつい方々」だを見ていました。パウロはまず、彼らの良い点をほめて、肯定的に受け入れました。これは、大変知恵のある、賢いやり方です。どんな民族でも、自分たちの先祖伝来の宗教を否定されたら、腹が立つものです。それだけで、最初から聞く耳を閉ざしてしまうでしょう。まずは肯定的に、その民族の良い点を見つけてほめるときに、彼らは心を開いて、聞こうとする姿勢になります。その次にパウロは、彼らの拝むものの中に「知られていない神に」と刻まれた祭壇があるのを見つけました。彼らが信じている宗教の中にある「共通点」を見つけ出して、そこを導入口として語り始めたのです。「あなたがたの宗教と、この点は共通ですね」と言うと、相手は自分たちを否定しているのではないのだと思って、安心します。また、パウロは彼らのうちのある詩人の言葉も引用しました。その民族のことわざなどを使うのも、大変良いやり方です。彼らがすでに良く知っている点から話すので、初めて聞く人でも理解しやすいのです。福音を全く聞いたことがない人々に語るときには、このような知恵が必要であり、また効果的です。……ミャンマーのカレン族には昔から、ある伝説がありました。それは「昔々、ヤワという偉大な神がある本を与えてくれたが、先祖がそれをなくしてしまった。しかしある時になると、白い男がやって来て、その本を見つけてくれる」というものです。宣教師にとって、何と都合の良い伝説でしょう！ジョージ・ボードウィン宣教師は、その「白い男」となって、「その本」聖書のみことばを伝え、それによって数多くのカレン族がイエス様を信じました。

4、パウロは神のことを、どのような方だと宣べ伝えましたか？

(使 17:24, 25)

(使 17:29)

(解説) パウロは共通点だけでなく、違う点もはっきり言いました。本当の神がどんなお方なのか、ちゃんと説明したのです。「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神、天地の主」「すべての人に、いのちと息と万物を与えておられる」「神である方を金や銀や石、人間の技術や考えで造ったものと同じであると、考えるべきではありません」……私たちの神は、唯一の創造主です。人間が作った偶像の神々とは、全く違います。ある人々は「どの宗教もみんな同じだ。みんな良いことを言っている」などと言います。しかしどう違うのかは、良く知りません。違いが分かるときにこそ、本物が何かが分かるのです。

5、ある人たちは、何のことを聞いてあざ笑いましたか？

(使 17:31, 32)

(解説) パウロが「神はキリストを死者の中からよみがえらせた」ということを話すと、ある人はあざ笑い、他の人も「いずれまた、もう一度聞くことにしよう」と言いました。世の中の多くの人々は「死者が復活するなんてありえない」と思って、信じようとしません。しかし、イエス・キリストの復活は、歴史の事実です。使徒たちと初代教会の弟子たちは、この復活の証人となって、それをそのまま事実通り証言しました。これを信じるなら、他の奇跡もみな信じることができます。そして主の復活を信じる者は、死んでも生きるのです。キリストの再臨のときに、私たちは復活して、主と共に永遠に生きるのです (I コリント 15 : 23、I テサロニケ 4 : 16, 17、黙示 20 : 4-6)。その後で信じなかった者も復活して、その罪をさばかれて、永遠の火の中で苦しむことになります (II テサロニケ 1 : 7-9、黙示 20 : 13-15)。この復活こそが福音の核心であり、私たちの最大の希望です。だから、伝道してあざ笑われても気にしてはいけません。私たちは、最後に逆転勝利するのです。信じますか？

6、どのような人たちが信仰に入りましたか？

(使 17:34)

(解説) パウロの伝道によって、裁判官のディオヌシオ、ダマリスという女の人、その他の人たちがパウロにつき従い、信仰に入りました。裁判官というのは、地位のある指導者で、その地域に影響力のある人です。伝道して多くの人々が信じなくても、気にしないで下さい。信じる人が一人でもいれば、それで大成功です。私たちが伝道するとき「主が備えられた一人」が必ずいます。その一人が大切なのです。まず一人を育てなさい。その一人に時間と労力を集中しなさい。一人が信じて変えられれば、その一人を通してもう一人が変えられます。主は真の弟子一人を通して、国と民族を変えることができるお方です。

7、あなたは主イエスのことを、どのように宣べ伝えますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

18章 同労者と共に働きなさい (使徒18章)

1、パウロはどんな仕事をしましたか？

(使 18:3)

(解説) パウロの仕事は、天幕作りでした。パウロはコリントで、アキラとその妻プリスキラに出会いました。彼らの職業も天幕作りだったので、パウロは彼らの家に住んで一緒に仕事をしました。同じ仕事を一緒にすることによって、パウロと彼らは親しくなり、単に同業者である以上に、主の宣教活動の「同労者」となりました。パウロは宣教師でしたが、必要があれば、同時に世の中の仕事もしました。それによって、財政的な必要が満たされるだけでなく、宣教のためにも同労者を得たのです。パウロが天幕作りだったことから、世の中の仕事をしながら宣教する人のことを「テント・メーカー」と言います。未信者は教会の中ではなく、世の中にいます。世の仕事をしていると、世の中の未信者たちともっと親しくなれます。彼らに対して、毎日生活の現場で言葉と行動を通して証しできます。彼らの中から救われる人が起こされたら、その人は職場で一緒に伝道する同労者となります。このテント・メーカー、職業宣教は、今日でも大変効果的な宣教方法です。神学校に行って牧師になることだけが献身なのではありません。世の中で仕事をするのは、単にお金を稼ぐためだけではありません。何か世俗的な、レベルの低い、完全にささげていない、「パートタイム」の働き人でもありません。世の仕事しながら宣教するのは、パウロ自身がやっていた、「フルタイム」の、立派な宣教スタイルなのです。

2、主はなぜパウロに、恐れなくて語り続けなさいと言いましたか？

(使 18:9, 10)

(解説) パウロだって、恐れることがあります。迫害に遭って、このまま語り続けて良いものか、迷ってしまうこともあったでしょう。だからこそ、主は幻によって、このように言って励ましたのです。主から直接幻を受けて、パウロはどんなに勇気づけられたことでしょう。それでパウロはコリントで1年半の間じつくりと腰を据えて、神のことばを教え続けることができました。そして、ユダヤ人たちが一斉に反抗してパウロを法廷に引いて行ったときにも、総督のガリオは彼らの訴えを退けて、主の約束の通り、パウロは守られたのです。私たちも宣教するとき、様々な困難、妨害にぶつかります。そのようなときに、主はあなたにこのように命令し、また約束しています。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」あなたが宣教している町には、主の備えられた、救われるべき神の民がたくさんいるのです。信じますか？この約束を信じて、恐れず、黙らず、福音を語り続けて下さい。主があなたと共にいて、あらゆる危害から守って下さいます。

3、プリスキラとアキラはなぜ、パウロに同行しましたか？

(使 18:18)

(解説) パウロがコリントの兄弟たちに別れを告げて、シリアに向けて出発するとき、プリスキラとアキラも同行しました。コリントで一緒に働きながら、パウロと彼らは深い信頼協力関係が築かれていました。それで、パウロが新しい宣教ビジョンに向けて出発するとき、彼らもそのビジョンを共有して、パウロにつき従って行ったのです。人は自分と仲が良くない人と、一緒に旅をしようとはしません。またビジョンが一致しない人とは、一緒に働くことができません。「約束もしていないのに、二人の者が一緒に歩くだろうか。」(アモス 3:3) 本当はビジョンが違うのに、違う意図で協力していると、「同床異夢」となって、やがて分裂することになります。宣教する上で非常に大切なのは「誰とチームを組んでやるか」です。これを間違うと、とんでもないひどい目に遭います。しかし、良い同労者に出会った人は幸いです。良い同労者とは、信頼関係が築けて、ビジョンが一致している人です。このような人とチームワークで宣教するなら、どんな困難な旅でも、一緒に乗り越えて行けるのです。

4、プリスキラとアキラはなぜ、アポロに神の道をもっと正確に説明しましたか？

(使 18:24-26)

(解説) アポロは聖書に通じていて、雄弁で霊に燃えてイエスのことを教えていましたが、ヨハネのバプテスマしか知りませんでした。プリスキラとアキラは、アポロの説教を聞いたとき、何かが足りないと感じたのでしょう。それで、彼らはアポロをわきに呼んで、神の道をもっと正確に説明しました。それによって、アポロは真の福音理解に導かれ、聖霊の力に満たされた伝道者となったのです。私たちは宣教の働きをしているときに、自分で自分の不足している点を知らないことがあります。また知っていても、自分でそれを直すのは容易なことではありません。そんなときに、個人的に相談し、助言して、導いてくれる人がいたら、どんなに助かるでしょう。このような人を「メンター」または「コーチ」と言います。私たちは、一人では宣教できません。このようなメンター、コーチが必要です。もし自分の周りに、そのような人がいないときには、それにふさわしい人が与えられるように祈って下さい。そして見つかったら、謙遜に自分から「私のためにコーチとなって頂けませんか」とお願いして下さい。そして、定期的にその人と連絡を取って、他の人に言えない「深い」話を相談して下さい。そうするときに、私たちは霊的に守られ、成長し、長く働きを続けることができるのです。

5、アポロがアカイアに渡るために、兄弟たちは彼をどのように助けましたか？

(使 18:27, 28)

(解説) エペソの兄弟たちは、アカイア (今のギリシア地方、アテネやコリントを含む) に行こうとしているアポロを励まして「アポロを歓迎するように」という手紙を書いてあげました。その手紙のおかげで、彼はアカイアに着いたら、そこの信者たちに受け入れられました。そしてアポロは信者たちを大いに

助けました。彼は聖書によってイエスがキリストであることを証明し、人々の前で力強くユダヤ人たちを論破しました。アポロは、エペソの兄弟たちの励ましと紹介があったからこそ、アカイアで効果的に宣教活動ができたのです。私たちは宣教するとき「自分が一人でこの働きをやっているのだ」などと思いがあってはいけません。誰かの励ましと推薦があったから、誰かが宣教地を紹介してくれたから、今の働きができるのです。宣教者、教会同士のネットワークは非常に大切です。ネットワークの外にいる働き人は、孤立して、道を外すようになりやすいものです。ネットワークの傘の下にいますと、互いに励まし合い、チェックし合って、働きが守られ、長続きします。私たちは「自分の教会、自分の働きだけ」を考えるのではなく、他の教会、他の働き人と連絡し合い、集まって協力し合い、支え合って共に宣教して行きましょう。

6、あなたと一緒に働く同労者は誰ですか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

19章 周りに影響を与えなさい (使徒19章)

1、エペソの弟子たちはなぜ、聖霊をまだ受けていませんでしたか？

(使 19:1-6)

(解説) エペソの兄弟たちは、ヨハネのバプテスマ、つまり悔い改めのバプテスマを受けていました。しかし、イエスを信じる者に与えられる聖霊については、聞いたこともありませんでした。それでパウロは彼らに主イエスの名によってバプテスマを授けました。そしてパウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに臨み、彼らは異言を語ったり、預言したりしました。今日でも、イエス様を信じたけれど、聖霊については何も知らない、聞いたことがない、というクリスチャンが沢山います。信仰生活に、聖霊の力は不可欠です。聖霊について聞いたことがないから、聖霊の力を受けられないのです。私たちはまず、聖霊について知る必要があります。聖霊様がどんなお方なのか、信じる者に聖霊が内住すること、聖霊に満たされる(支配され、力づけられる)方法、聖霊に満たされるときに、罪に勝利して、主の証人となり、御霊の実を結び、霊的に成長していくこと、などを、学ばなくてはなりません。聖霊に飢え渴いて、聖霊を慕い求めて祈り続ける人に、主は必ず応えて下さり、聖霊の力を注いで下さいます。

2、パウロがどのようにしたので、アジアに住む人々はみな主のことばを聞くようになりましたか？

(使 19:9, 10)

(解説) パウロは毎日、ティラノという人の講堂で、神の国について論じました。それが2年間続いたので、アジア州（今のトルコ西部地方）に住む人々はみな主のことばを聞くようになりました。では、広いアジア州の人々全員が、その講堂に直接行ったのでしょうか？いいえ、おそらくそうではないでしょう。ではどうやって、アジア州のみんなにみことばを聞かせたのでしょうか？それは、その講堂で弟子を育てて派遣したからです。ティラノの講堂は、この地域の宣教センター、聖書学校となりました。聖霊を受けた最初の弟子たちは、ここでみことばによって訓練され、整えられて、伝道者として各地に遣わされて行ったことでしょう。そこで彼らが伝道して、弟子が弟子を次々と生み出していきました。このような弟子養育と再生産の働きを毎日、しかもそれを2年間も継続したので、ついにはアジアに住む全ての人々にみことばを聞かせることができたのです。信仰は「聞くこと」から始まります（ローマ10:17）。全ての人々に福音を「聞かせる」こと、それが宣教の第一歩です。そうするときに、やがてその中から信じる者が起こされていきます。福音の種を豊かに蒔く者は、豊かに刈り入れるのです。「継続は力」です。何事でも、毎日少しずつコツコツと続けていくなら、やがて大きな実を結ぶようになるのです。

3、神はパウロの手によって、どのようなことを行われましたか？

(使19:11,12)

(解説) 神はパウロの手によって、驚くべき力あるわざを行われました。パウロが身に着けていた手ぬぐいや前掛けを、持って行って病人たちに当てると、病気が去り、悪霊も出て行くほどでした。聖霊に満たされて、みことばを宣べ伝えるときに、神はその人の手を通して、奇跡を行って下さいます。病気はいやされ、悪霊は出て行きます。神が私たちと共に働いて、その奇跡を通して、福音のみことばを証明して下さい。これがリバイバルのしるしです。私たちは伝道するとき、もっと病気のいやしが起こるように、信仰を持って大胆に祈りましょう。神はあなたの手によって、驚くべきわざを行って下さいます。

4、スケワの子たちはなぜ、悪霊たちを追い出せなかったのですか？

(使19:13-16)

(解説) ユダヤ人の祭司長スケワという人の7人の息子たちは、巡回祈祷師でした。彼らが、悪霊につかれている人たちに向かって、試しに「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる」と言ってみました。すると悪霊がこう答えました。「イエスのことも、パウロのこともよく知っている。しかしおまえたちは何者だ。」そしてその悪霊につかれている人が彼らに飛びかかり、打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負って逃げ出しました。悪霊は、イエスが神の御子であり、その御名に力があることを良く知っています。しかし同時にその御名を使う人が本当に主イエスを信じている人か、それとも、信じてもないのにただ試しで言っているだけの人なのか、良く知っているのです。イエスの御名は、何か呪文のように、ただ機械的に唱えればいい、というものではありません。主イエスの御名を、自分の力を披露するために利用してはいけません。そのような祈りは、たとえイエスの名によって祈っても、聞

かれません。悪霊は出て行くどころか、あざ笑って逆に攻撃するでしょう。主イエスを自分の人生の主人として受け入れ、その命令に従う人、その御名の力を信頼して、主の御心の実現のために御名の権威を使う人を通して、主は働いて下さるのです。

5、主のことばは、どのようにして力強く広まっていきましたか？

(使 19:17-20)

(解説) スケワの子たちが悪霊に打ち負かされた事件は、エペソに住む全ての人々に知れ渡ったので、みな恐れを抱き、主イエスの名をあがめるようになりました。そして信仰に入った人たちが大勢やって来て、自分のしていた行為を告白し、明らかにしました。また魔術を行っていた者たちが多数、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てました。このようにして、主のことばは力強く広まり、勢いを得ていきました。神の力あるみわざが現されるとき、人々は神を恐れ、御名をあがめます。そして主イエスを信じ、自分の罪を悔い改めるようになります。たとえイエスを信じて、魔術や偶像崇拝の罪を持ったままで、その人が以前の罪の生活から変わっていなければ、それは本当の信仰とは言えません。聖い神に出会うと、私たちは自分の汚い罪を離れるようになります。悔い改めとは、自分の罪を告白して、それを捨てることです。悔い改めは、リバイバルのかぎです。悔い改めるときに、聖霊が注がれ、私たちは霊的に新しくされます。一人が悔い改めて人生が変えられるときに、それは周りの人たちに次々と伝染していきます。そうやって、主のことばは力強く広まり、勢いを得ていくのです。

6、パウロの宣教は、その地域社会に対してどれほどの影響力を持っていたか？

(使 19:26, 27)

(解説) デメテリオという名の銀細工人は、女神アルテミスの神殿の模型を作っていましたが、彼は同業者たちにこう言いました。「見聞きしているように、あのパウロが、手で造った物は神ではないと言って、アジアのほぼ全域にわたって、大勢の人々を説き伏せ、迷わせてしまいました。」彼は未信者でしたが、パウロの宣教によって、アジア全域の大勢の人々が主を信じたことを認めました。そして、そのせいで自分の偶像造りの仕事なくなることを恐れ、脅威を感じて、大騒動を起こしたのです。福音宣教は、地域社会に大きな影響を与えます。人々が主イエスを信じると、偶像崇拝から脱却し、生活が変えられ、未信者でさえもその変化を認めるようになります。もしそうならなかったら、福音が宣教されたとは言えません。宣教とは、単にクリスチャン人口を増やすことではありません。名目上、名前だけのクリスチャンがたくさんいても、人々の生活を変えることができれば、意味がありません。宣教とは「民族を弟子とする」ことです。弟子とは、主に従って生きる人です。そのような主の弟子が増えていくなら、その地域の人々に対して必ず大きな影響を及ぼすようになります。そうして、地域社会が神の御国へと変えられていくのです。

7、あなたの人生は周りの人たちに対して、どのような影響を与えていますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

20章 あなたの任務を全うしなさい (使徒20章)

1、パウロはエルサレムで、どんなことが起こると言われていますか？

(使 20:22, 23)

(解説) パウロは「聖霊に縛られて」エルサレムに行こうとしていました。そこでどんなことが起こるのか、聖霊が証しして言っていることは「鎖と苦しみが待っている」ということでした。エルサレムに行ったら鎖に縛られて、苦しみに遭うとはっきり分かっているのに、なぜパウロは行こうとするのでしょうか？それは「聖霊に縛られて」導かれているので、それに従っているのです。人間誰でも、苦しみが好きなのはいません。苦しみに遭うのが分かっているなら、それを避けようとするのが普通です。しかしパウロは、聖霊の導きに従順して、その所に向かいました。私たちが宣教地に向かうとき、どんなことが起こるのか分かりません。ただ分かっているのは、苦しみが待っているということです。それでもなお宣教地に向かうのはなぜでしょうか？それは、聖霊に縛られているからです。聖霊がそこに行くように強く導いているので、自分の思いではなくて、聖霊の思いを自分の思いとして、その導きに従って行くのです。宣教に苦難があるのは「当たり前」です。それを覚悟の上で、行くのです。主に従うから、そうするのです。「宣教に行く」というのは、そういうものです。

2、パウロはなぜ、自分のいのちを少しも惜しいとは思わないのですか？

(使 20:24) けれども、私が自分の走るべき道のりを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいとは思いません。

(解説) パウロには、任務がありました。その任務とは「神の恵みの福音を証しする」ことでした。パウロはこの任務を、主イエスから直接受けました。パウロにとって「自分の走るべき道のりを走り尽くす」とは、この福音を証しする任務を全うする、という意味です。その任務を果たし終えることができるのなら、自分のいのちは少しも惜しくないと思いました。普通の人には、自分の命が一番大切だと考えます。し

かしパウロは「自分の命よりも大切なものがある、この命よりも、この福音の任務の方がずっと価値がある」と考えました。だから「エルサレムに行ってたとえ死んだとしても全く構わない、そこで自分の任務を全うできるのなら死んでもいい」と思ったのです。自分の任務をはっきり分かっている人は、その任務完了のために命をかけます。その任務がどんなに重要かを知っているからです。私たちの任務は、福音宣教です。私たちはこの任務を、主イエスから受けたのです。私たちは、自分の走るべき道のりを走り尽くして、この任務を果たし終えなければなりません。中途半端に終わってしまってはならないのです。あなたの人生の任務は何ですか？あなたはその任務を全うしましたか？その任務完了のために、自分の命をささげる覚悟がありますか？

3、パウロはなぜ「だれの血に対しても責任がない」と言えるのですか？

(使 20:26, 27)

(解説) パウロは「神のご計画のすべてを、余すところなく」知らせたからです。神のご計画とは、イエス・キリストによる救いの計画、福音のみことばのことです。この福音の内容全てを、余すところなく彼らに教えておいたので、パウロは自分の責任を全うした、と宣言できたのです。もしある人が福音を聞いても従わないなら、それはその人の責任です。その人は「血の責任」つまり神のさばきの座の前で、自分の責任を問われることになります。だから、福音を知らせた後、その人が受け入れなくても、「自分のせいだろうか」といちいち落ち込んではいけません。それはあなたの責任ではなく、聞いた人の責任なのです。しかし、もし福音を知らせなかったら、それはあなたの責任です。神はあなたに「なぜあなたは自分の責任を果たさないで、彼に福音を伝えなかったのか？」と責任を問うことでしょう。あなたは、神の前で自分の責任を果たしましたか？パウロのように「私は彼らの血に対して責任がない」と宣言できるほど、神の計画の全てを彼らに知らせましたか？私たちの責任は、この神の救いのご計画、イエス・キリストの福音の全体を、余すところなく教えることです。神の御前で、この責任を全うしましょう。

4、群れの監督は、どんなことに気を配らなければなりませんか？

(使 20:28-31)

(解説) 教会の監督は「自分自身と群れの全体に」気を配らなければなりません。なぜなら、凶暴な狼（サタン）が教会の中に入り込んで来て、容赦なく教会を荒らし回るからです。また、教会員の中からも、色々と曲がった教えを語って、弟子たちを自分のグループに引き込もうとする者が起こってくるからです。だからパウロは3年の間、夜も昼も涙と共に、一人一人を訓戒し続けて、目を覚ましているように教えてきたのです。教会の牧師、指導者はまず、自分自身に気を配らなければなりません。自分自身が間違った教えに惑わされて倒れないように、みことばの真理に堅く立って、みことばに従った聖い生活をしなければなりません。次には教会全体に気を配らなければなりません。教会員一人一人の霊的状态はどうか、弱ったり落ち込んだりする人はいないか、みことばによって霊的に成長しているか、外部から曲がった教えを聞いて、それに惑わされていないか、内部で分派を起こす人はいないか、などを、良くチェッ

クしなければなりません。そしてパウロがしたように、一人一人を訓練し、戒めて、愛と涙を持って教え続けるのです。そうするときに、教会は守られ、霊的に成熟していきます。

5、パウロは彼らを、何にゆだねましたか？

(使 20:32)

(解説) パウロはエペソの教会を、神とその恵みのみことばにゆだねました。みことばは教会を成長させ、御国を受け継がせることができますからです。宣教者はまず、みことばによって教会を訓練します。そして教会のリーダーたちがみことばから自分で神の御声を聞けるようになってきたら、彼らは自立的に成長し、御国の宣教を続けることができます。それで宣教者はその教会を神の御手に委ねて、次の宣教地に移って行くのです。宣教者は、教会をいつまでも自分の所有物のように思っはいけません。「自分はいつかは離れるんだ」ということを最初から念頭に入れて、最初からそれをメンバーにも伝えておくべきです。「神とその恵みのみことば」こそが、教会を導くのです。

6、パウロはなぜ、働きましたか？

(使 20:33-35)

(解説) パウロは、自分の必要のためにも、共にいる人たちのためにも働きました。それは、共にいる教会のメンバーたちに、模範を示すためでした。指導者自身が金銀や衣服を貪らず、労苦して働き、経済的に弱い者を助け、主イエスが言われた通りに、他の人に豊かに与えることを、あらゆる状況を通して「見せて」来たのです。世の仕事をしながら宣教する「テント・メーカー」宣教スタイルの良い点は、自分自身の必要が満たされるだけでなく、他の信者たちに模範と励ましとなることです。教会の指導者自身が平日も世の中で労苦して働き、献金する姿を見て、教会員たちはチャレンジを受けて、同じようになるでしょう。有給の教職者だと、教会員たちは「先生は給料をもらっているからやっているんだ」と思って、自分たちはお客さんとなり、受け身的な「一般信徒」になってしまうことがあります。教会のリーダーもメンバーも同じく世の仕事をしながら、一緒に活動し、一緒に伝道し、一緒に時間をささげるときに、その姿を見て、メンバーの生活は変えられていくのです。

7、あなたが全うすべき任務は何ですか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

21章 正しくても誤解される（使徒21章）

1、聖霊はパウロに、何と言っていましたか？

（使 21:4）

（使 21:11）

（解説）ツロの弟子たちは、御霊に示されて、エルサレムに行かないようにとパウロに繰り返し言いました。預言者アガボも、パウロの帯で自分の両手と両足を縛って「この帯の持ち主を、ユダヤ人たちはエルサレムでこのように縛り、異邦人の手に渡すことになる」と聖霊が言っていると告げました。では聖霊は本当に、パウロがエルサレムに行かないようにと命令したのでしょうか？もしそうだったら、パウロは聖霊の命令に従って、エルサレムに行かなかったでしょう。では、聖霊が示したのは、どういう意味だったのでしょうか？それは「エルサレムに行くと、このような苦難に遭うから、覚悟して行きなさい」という意味なのです。しかし周りの人たちは、その聖霊のことばを聞いて「そんなことになっては大変だからエルサレムに行かないように」と繰り返し懇願しました。同じ聖霊の示しを受けても、その解釈によって、正反対の答えが出てきます。人間的、世の常識的な判断なら、そのような結論になるでしょう。しかし、周りの人全員がそう言うから、それが主の御心とは限らないのです。本当に大切なことなら、聖霊はその本人に直接話します。たとえ他の全員が反対しても、聖霊が行けと言うなら行くのです。私たちは周りの意見に流されずに、聖霊の御声、神の御心を良く見分けて、従っていきましょう。

2、パウロは主イエスの名のためなら、何をも覚悟していますか？

（使 21:13）

（解説）パウロは主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟していると言いました。パウロにとっては、牢獄に入れられることも、殺されて殉教することも、問題ではありませんでした。パウロにとってそれよりも大切なのは、聖霊の命令と導きに従って、宣教の任務を完了することだったのです。主のために死をも恐れない人は、どんな迫害、どんな困難も妨害にはなりません。逆に言うと、死を覚悟しているなら、どんなことでもできるのです。このような勇気ある一人の神の人を通して、主はその御心、宣教のご計画を実行されます。このような人を用いて、主は世界をひっくり返すのです。

3、パウロが言うことを聞き入れないので、彼らは何と言いましたか？

（使 21:14）

（解説）パウロが言うことを聞き入れようとしないので、彼らは「主の御心がなりますように」と言って、

口をつぐみました。最初は自分の意見が正しいと思ったので、それを強力に主張したのですが、パウロがそれを聞き入れないので、あきらめて、もう何も言いませんでした。そして、自分の考えを超えた主の御心、主の計画があるかもしれないと思って、それに委ねることにしたのです。私たちも時々、他の人に対して「あなたはこうすべきだ」と言って強く勧めるときがあります。しかし、その人の人生を決めるのは、あなたではなく、その本人です。いくら周りが騒いでも、本人の決心が固ければ、どうしようもありません。そのようなときは「主の御心になりますように」と言って、御手に委ねて下さい。もしかしたら、あなたの考えをはるかに超えた、主の特別なご計画があるかもしれません。私たちは自分の考えを他人に強要しないで、神の主権と導きに従うようにしましょう。

4、パウロはなぜ、ヤコブを訪問しましたか？

(使 21:18, 19)

(解説) パウロはエルサレムに着いたら、すぐにヤコブ（イエスの弟、ヤコブの手紙を書いた。十二使徒のヤコブではない）を訪問しました。ヤコブはエルサレム教会の指導者だったからです。そこには教会の長老たちもみな集まっていました。そこでパウロは彼らにあいさつをしてから、自分の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたことを、一つ一つ説明しました。彼らはそれを聞いて、神をほめたたえました。そしてパウロに、色々な忠告や助言をしました。私たちは、自分がしている宣教活動のために祈ってくれている母教会の牧師や、宣教団体のリーダーに対して、宣教報告をする義務があります。時々彼らに会って、あいさつをすることは、自分の指導者に敬意と感謝を表すことになります。あなたの宣教報告を、彼らは喜んで聞いて、神があなたを通してなされたみわざのゆえに、神をほめたたえることでしょう。そして今のあなたに必要な、適切なアドバイスもしてくれるでしょう。経験の豊かな賢い指導者は、物事を長期的、全体的に見るものです。あなたが見えていない所まで、指導者は見えるのです。時には耳の痛い忠告をするかもしれません。でも、こわがったり、避けたりしないで下さい。彼はあなたのためを思って、あなたを愛しているから、そう言うのです。その助言はあなたにとって大きな守りとなり、宝となるでしょう

5、パウロは長老たちの忠告に対して、どのようにしましたか？

(使 21:21-26)

(解説) ヤコブと長老たちはパウロに対して、次のような忠告をしました。「誓願を立てている 4 人の人たちを連れて行って、一緒に身を清め、彼らが頭を剃る費用を出してあげて下さい。そうすれば、あなたについてユダヤ人の間で聞かされているうわさ（パウロがユダヤ人に、モーセに背くように教えている、といううわさ）は根も葉もないことだということが、皆に分るでしょう。」そこでパウロは翌日、その人たちと共に身を清めて宮に入りました。長老たちの忠告に対して、パウロは「そんなこと必要ない」とか「そんなことをするのは面倒だ」とか言ったり、その場で口だけで「ハイハイ」と言ってやらなかったりするようなことはありませんでした。パウロは、長老たちの忠告に、すぐ従い、言われた通りにしたので

す。これこそが従順です。パウロは自分がどんなに指導者になっても、自分の目上の人に対して忠実でした。傲慢な人は従順できません。謙遜な人だけが、従順できます。そして、謙遜で従順な人は、教会共同体の傘の下で守られるのです。

6、ユダヤ人たちがパウロについて言っているうわさは、正しいですか？

(使 21:21)

(使 21:24)

(使 21:28, 29)

(ヨハネ 7:51)「私たちの律法は、まず本人から話を聞き、その人が何をしているのかを知ったうえでなければ、さばくことをしないのではないか。」

(解説) ユダヤ人はパウロについて、次のようにうわさしていました。「パウロはユダヤ人に、子どもに割礼を施すな、慣習に従って歩むなどと言って、モーセに背くように、至る所で教えている。」その上、パウロが宮にいるのを見て「ギリシア人を宮の中に連れ込んで、神聖な場所を汚している」と叫びました。彼らは以前、町でパウロがエペソ人と一緒にいるのを見かけて、彼を宮に連れ込んだと思ったのです。それで彼らは群衆を扇動して大騒ぎになり、人々は殺到してパウロを捕らえ、宮の外へ引きずり出し、打ち殺そうとしました。では、パウロについてのこの情報は、事実だったのでしょうか？いいえ、このうわさは、全く根も葉もないことで、何の根拠もないデマでした。パウロは律法を守って正しく歩んでいる人でした。ユダヤ人に対して、律法に背くように教えたこともありませんでした。宮に連れ込んだのも、異邦人ではありませんでした。それなのに、彼らはパウロのしたことを全く誤解していて、その間違った「架空の情報」が本当だと思い込んで、それに対して怒り、訴え、パウロを殺そうとしたのです。その群衆の中で、その情報が本当に事実かどうか確かめようとした人は、誰もいませんでした。人々がみんなそう言うから、そうだと「信じ込んで」いたのです。これは恐ろしいことです。しかし、このようなことは、実際によく起きることなのです。私たちは、他人のうわさを、簡単に信じてはいけません。悪いうわさや評判は、特にそうです。自分に親しい人がそう言っていたとしても、それが事実とは限らないのです。ニコデモもパリサイ人たちに「律法では、まず本人から話を聞いてからでなければ、さばくことはしない」と言いました。本人に直接確かめもしないで、その人のことを悪く言うのは「罪」です。私たちは、公正な目と心で、他人と物事を判断するようにしましょう。そして、もし判断するのに確かな直接情報がまだ足りないときには、口をつぐんで黙っているようにしましょう。

7、パウロは誤解されたときに、どうしましたか？

(使 21:37-40)

(解説) パウロは千人隊長に「少しお話ししてもよいでしょうか」と尋ねました。まず権威者に対して、丁寧をお願いしました。千人隊長はパウロのことを「近頃暴動を起こして、4千人の暗殺者を荒野に連れて行ったエジプト人」だと「勘違い」していました。それに対して「私はユダヤ人で、れっきとした町の

市民です」と言って、自分がどういう者か身分を明らかにしました。それで、権威者から正式な許可を得て、弁明を始めました。しかも、異邦人の千人隊長にはギリシア語で話して誤解を解き、ユダヤ人の群衆にはヘブル語で話したので、人々は静かになりました（使 22：2）。パウロには、混乱を治める「知恵」があったのです。情報が混乱して誤解を受けているときには、このようにしなければなりません。複数の相手が誤解して興奮しているときには、何を言っても耳に入りません。だからまず権威者 1 人に対して丁寧に、冷静にお願いし、弁明の機会を得るように許可を求めます。そして自分の身分を知ってもらい、彼の信用を得ることです。そして相手が理解できる言葉と言い方で、自分の言い分を正しく順序立ててはっきり弁明するのです。誤解を受けたとき、怒って興奮して言い争いをしてはいけません。それは全く逆効果で、火に油を注ぐようなものです。パウロのように冷静に知恵を持って注意深く対応した上で、自分の主張を正しく知ってもらうのです。それでも相手が誤解を解こうとしないときは……。そのときには、それを神の時と御手に委ねましょう。周りの人みんながあなたを誤解しても、神様だけは、あなたのことを全てご存じで、正しくさばいて下さいます。

8、あなたは周りから理解してもらえないときに、どうしますか？

（解説）最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

2 2 章 人生体験を証ししなさい（使徒 2 2 章）

1、パウロは証しするときに、どのように話し始めましたか？

（使 22:1-3）

（解説）パウロはユダヤ人の群衆に対して「兄弟ならびに父である皆さん」とヘブル語で語りかけました。パウロが自分たちの言語を使って、相手を尊重して丁寧に語りかけるのを聞いて、群衆は静かになりました。それからパウロはこう言いました。「私はユダヤ人で、この町で育てられ、ガマリエルのもとで律法の教育を受け、皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。」これを聞いて、群衆はどう思ったでしょう。「彼も私たちと同じようにユダヤ人なのか。同じ町エルサレムの人で、あの有名なガマリエル先生の弟子なのか。そして私たちと同じように、神に対して熱心な者なんだ。」パウロはまず自己紹介をして、彼らとの共通点から話し始めました。そうするときに、彼らは共感し、安心して、パウロの弁明を受け入れようとする心の姿勢ができたのです。私たちも未信者に主を証しするときに、まず自分が誰

なのかを伝えなければなりません。自分の名前、年齢、家族、出身地、経歴などを話すとき、相手は興味を持ちます。それから「自分もあなたがたと同じような人でしたよ」と言って、相手との共通点を話して下さい。主を信じる前の生活はどうだったのか「みんなと同じように罪人だった、同じような問題で悩んでいた」などと、率直に証しして下さい。相手が自分と同じような普通の一人の人間なのだと知るときに、聴衆は共感して、相手の言うことに耳を貸すようになるのです。

2、パウロはなぜ主イエスに「私はどうしたらよいでしょうか」と尋ねたのですか？

(使 22:8-10)

(解説) パウロは、自分が今まで迫害していたナザレのイエスが、本当はどんな方だったのかを知りました。その方は「主」であり、救い主、神の御子であることを悟ったのです。そしてその方が、自分の行くべきことを全て定めておられ、人生を治め導いておられると信じました。だから、その人生の主なるイエスに「主よ、私はどうしたらよいでしょうか？」と尋ねたのです。それで主は、彼が行うように定められている全てのことを、告げて下さいました。……あなたはイエス様がどんな方か知っていますか？イエス様はあなたの「主」です。あなたの人生の主人であり、あなたの人生の全てを治め導いておられる方です。だから、あなた行うように「定められて」いる全てのことを、あなたに告げて下さいます。あなたが定めるものではありません。主がお定めになっているのです。あなたの人生に対して定められている主のすばらしいご計画を、あなたは知っていますか？あなたもイエス様に「主よ、私はどうしたらよいでしょうか？」と尋ねて下さい。主だけがその答えを知っておられます。主はあなたに、驚くべき将来のビジョンを告げて下さるでしょう。

3、神はなぜパウロを選びましたか？

(使 22:14, 15)

(解説) 神はパウロをお選びになったのは、パウロが御心を知り、義なる方イエスを見て、イエス様の口から御声を聞くようになるためです。パウロはその主イエスのために、全ての人に対して、見聞きしたことを証しする証人となるのです。これが、神がパウロについてお定めになっていたビジョンでした。……あなたはなぜ選ばれたのでしょうか？他にも未信者はたくさんいるし、優れた人もたくさんいるのに、なぜあなたが救いを受けたのでしょうか？それは、あなたが義なる方イエス様に出会い、その方の御声を聞き、その御心を知るようになるために、選ばれたのです。では、その御心とは何でしょうか？それは、あなたが出会って体験したそのイエス様のことを証しする証人となることです。主イエスのために人生をささげて、全ての人に対して主を証しすること、それこそがあなたについて定められている主のビジョンなのです。あなたに対する主の選びとビジョンを、信じて受け入れて下さい。主の御心が、あなたの人生になされますように。

4、人々が主についての証しを受け入れないとき、どうしたらよいですか？

(使 22:18)

(使 22:21)

(解説) パウロはエルサレムにいるユダヤ人たちに、主について証しました。しかし人々は、それを受け入れませんでした。それで主はパウロに、エルサレムを離れて、遠く異邦人のほうへ行くように遣わしました。私たちが主を証しするときに、人々がいつもそれを受け入れるとは限りません。あなたの証しを拒否し、反対し、むしろ迫害することもあることを、覚えていて下さい。では、そのようなときは、どうしたらいいのでしょうか？主イエスを証しすることを、やめるべきでしょうか？いいえ、そんなことはありません。そのようなときには、他の人々に証しすれば良いのです。あなたの証しを待っている人々、異邦人たちが、他にたくさんいます。あなたが主イエスの救いを証しするときに「こんな大切なことを教えてくれてありがとう」と言って、泣いて感謝する人が、どこかに必ずいるのです。主がそのような人を備えていて下さいます。伝道とは「宝探し」です。そのようなビジョンを持って、あきらめずに証し伝道を続けて下さい。主があなたを遣わす、どんな所へでも行って、語って下さい。

5、パウロが生まれながらのローマ市民であることは、周りにどのような反応を起こさせましたか？

(使 22:25-29)

(解説) パウロをむちで打って取り調べようとしていた百人隊長は、パウロがローマ市民であると聞いて、すぐにパウロから身を引きました。千人隊長も、パウロを縛っていたことを知って恐れしました。なぜなら、ローマ市民は裁判を受ける権利が保障されていて、ローマ市民を無法に縛ったりむちで打ったりしたら、裁判に訴えられて罰せられるかもしれないからです。人々はこのローマ市民権が欲しくて、多額の金を払ってそれを買ったりしました。そのくらい、ローマ市民の権利は強かったのです。パウロは、生まれながらのローマ市民でした。そしてその権利を、宣教のために最大限に活用しました。では私たちは、どこの市民でしょうか？私たちは、イエス・キリストを信じたときから、神の御国の民、天国の市民です。「私たちの国籍は天にあります。」(ピリピ 3:20)そして、神の国の市民権は、強いのです。神の民は、神から身分と権利が保障されています。何かあるときには、天地を支配する神に直接訴えることができます。神は全世界のさばき主です。サタンやその手下どもの不法な攻撃をさばいて、ご自分の国民の権利を守って下さるのです。私たちは自分の神の民としての権利を正しく知って、それをもっと宣教のために活用していきましょう。

6、あなたは自分の人生体験を、どのように証ししますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

23章 神の計画があるから（使徒23章）

1、パウロは最高法院の中でなぜ、復活について話しましたか？

（使 23:6-10）

（解説）最高法院の議員の一部はパリサイ人で、一部はサドカイ人でした。パリサイ人は、復活や御使いや霊は存在すると信じており、サドカイ人はそれらがいずれも存在しないと信じていました。パウロは以前パリサイ人で、パリサイ人の信条をよく知っていました。しかも、以前はパウロも最高法院の議員の一人で、議員たちがパリサイ人とサドカイ人の2つに分かれていつも論争していることも、よく把握していました。それを見て取ってパウロは、「死者の復活という望み」つまり「イエス・キリストを信じる者は死んでも復活するという信仰」についてさばきを受けている、と叫んだのです。そうすることによって、パリサイ人の議員たちが自分の味方をしてくれることを計略したのです。実際パウロが狙った通りに、最高法院は2つに分裂して、騒ぎが大きくなりました。そしてパリサイ人の何人かは「この人には何の悪い点も見られない」と主張しました。論争がますます激しくなったので、千人隊長は恐れて、パウロを法院の中から引っ張り出すように命じました。こうしてパウロはその場を逃れて、守られたのです。パウロは知恵がありました。それは、単に学問的知識の知恵ではなくて、周りの状況を把握する知恵、どういう言葉を適切に言うべきか見分ける知恵、相手を自分の味方の側につける知恵、危険の中で自分を守る知恵、問題を上手に切り抜ける知恵でした。私たちも問題や危険に直面したとき、このような知恵が必要です。そして、このような知恵は、神から来ます。「人々があなたがたを引き渡したとき、何をどう話そうかと心配しなくてもよいのです。話すことは、そのときに与えられるからです。話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話される、あなたがたの父の御霊です。」（マタイ 10:19, 20）天からの知恵の言葉を求めて、危機的状況から脱出して下さい。神があなたを守って下さいますように。

2、主はパウロに、どのような神の計画を示しましたか？

（使 23:11）

（解説）主は夜にパウロのそばに立って「勇気を出しなさい」と言って励ましました。そして「エルサレムで主を証ししたように、ローマでも証しをしなければならない」と言って、パウロに神の計画とビジョンを示しました。最高法院での裁判で大変だったパウロは、この神の計画を知って、どんなに励まされたことでしょうか。そして、今自分は捕らえられて裁判にかけられて、命の危険に遭っていても、「ローマで主を証しする」という神の計画が成就するまでは、決して死なない、神に守られると確信できたのです。困難な状況の中に神の計画があると知っている人は、どんな大変な嵐の中にあっても、揺れ動きません。神の御心になることを信じて、前進することができます。しかし、自分の人生に対する神のご計画が分からなくなってしまうと、問題の中で心が揺れ動いてしまうのです。問題や困難に遭ったとき、勇気を出して下さい。そして、その状況の先にある神のご計画が何なのかを、祈り求めて下さい。神はあなたに、ご

自身の深い計画を示して下さるでしょう。

3、パウロを殺そうとする陰謀は、誰によって、パウロと千人隊長に知らされましたか？

(使 23:16-22)

(解説) ユダヤ人たちの 40 人以上の者が「パウロを殺すまでは食べたり飲んだりしない」と呪いをかけて誓い合いました。それで、パウロのことをもっと詳しく調べるふりをして、彼を連れて来るように、千人隊長に願い出て、彼が来る前に、待ち伏せして殺すという陰謀を企てました。ところがこのことを、パウロの姉妹の子が耳にしたのです。それでこの青年は、その件を兵営にいるパウロに知らせました。パウロはこの青年を千人隊長の所に送り、この陰謀を伝えて、ユダヤ人たちの申し出を承諾しないように言いました。この「パウロの姉妹の子」がいなかったら、どうなっていたことでしょうか！パウロは殺されてしまったでしょう。しかしこの青年がこの陰謀を聞いて、すぐパウロに伝えたので、パウロは助かったのです。誰がこのように導いたのでしょうか？そうです。主です。主がこの青年を備えて下さったのです。その陰謀を話している所になぜかこの青年がいて、それをたまたま耳にするように、主が計画して下さったのです。私たちの人生にも、このような「主が備えた人」がいます。「この人がいなかったら、私の人生はどうなっていたことだろうか」というような、主の計画した「不思議な」出会いがあるのです。主は、ご自身の計画を成し遂げるために、そのような出会いを備えて下さいます。あなたには今まで、そのような出会いがありましたか？……きっとあったことでしょう。私たちはこのような「主の備えた人」たちのおかげで、今生きているのです。主の深いご配慮と導きのゆえに、主に感謝しましょう。

4、パウロを守るために、何が準備されましたか？

(使 23:23, 24)

(解説) 千人隊長は、パウロを陰謀から守るために、すぐその日の夜 9 時に、彼をカイサリヤにいる総督フェリクスのもとへ送ることにしました。彼の護送のために、歩兵 200 人、騎兵 70 人、槍兵 200 人まで用意しました。また、パウロを乗せて無事に送り届けるように、馬を準備しました。そして総督フェリクスに、事情を説明した手紙まで書いてくれたのです。何というすごい守りでしょう！これでは、ユダヤ人たち 40 人以上がパウロを殺そうとしても、手も足も出せません。こうしてサタンの計略は、破られたのです。ハレルヤ！！主はご自身の計画のために、パウロをローマまで送って宣教させる、という計画を成就するために、このような特別な方法、特別な守りを与えて下さったのです。もし普通の方法で宣教旅行に行っていたら、途中で敵に殺されていたでしょう。しかし主は、パウロを囚人という形で送りました。ローマ市民の囚人なので、このように 470 人もの兵隊がしっかり守って護送してくれたのです。主は私たちのためにも、このように守って下さいます。主の天使の軍勢を動員して、全ての悪霊の攻撃から防衛して下さいます。主のすばらしい計画と守りのゆえに、主を賛美します。

5、パウロに、死刑や投獄に当たる罪はありましたか？

(使 23:29)

(解説) パウロが訴えられているのは、ユダヤ人の律法に関する問題のためで、死刑や投獄に当たる罪はないと、千人隊長も認めました。それなのに、なぜパウロはこのような捕らえられて、裁判にかけられるのでしょうか？それは、その裁判を通して、パウロが主イエスを証しするためです。パウロはこの裁判という機会を通して、多くの人たち、特に普通では会うことのできない千人隊長や総督たちと会って、主を証しすることができました。主の計画と方法は、私たちの計画よりも、はるかに高いのです。私たちは、何の罪もないのに、他人から訴えられることがあります。何の罪も思い当たらないのに、理由のない苦しみに遭ったりします。しかし、そんなとき、失望しないで下さい。そのときは分からなくても、後で分かるようになります。主の深いご計画、主の不思議な方法で、こうなったのだ、と告白する日が、きっと来ます。その日を信仰によって待ちながら、今の暗やみのトンネルの中を前進して行きましょう。主はあなたの人生に、いつも最善の計画を持っておられるのです。

6、40人以上の者がパウロを殺そうとしても、殺すことができなかったのは、なぜでしょうか？

(解説) 多くのユダヤ人が、パウロを殺そうとしました。40人以上の者がパウロを殺すまでは飲んだり食べたりしないと誓って、陰謀を企てました。それでも、パウロは死にませんでした。むしろ生かされて、守られたのです。なぜでしょうか？それは、主が守ったからです。主はなぜパウロを守られたのでしょうか？それは主の計画があったからです。その主の計画とは、何でしょうか？それは、彼を通して主イエスを異邦人に証しする、という計画です。パウロはこの宣教の計画と使命があると分かったので、死をも恐れず前進しました。主の使命がある人は、死にません。その使命を成し遂げるまで、主がその人を生かし、守っているからです。私たちの命は、主の御手の中にあります。私たちが今生きているのは、主の何か深いご計画があるから、主によって「生かされている」のです。私たちは、この地上で生かされている間、この主の計画と使命を信じて、その御心の実現のために人生をささげていきましょう。

7、あなたが今、この地上で生かされているのは、どのような神の計画があるからでしょうか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

24章 信仰を妨害するもの（使徒24章）

1、パウロはなぜ、いつも良心を保つように最善を尽くしていますか？

（使 24:14-16）

（解説）パウロは神に仕え、みことばを信じ、復活の望みを抱いて生きてきました。その信仰を守るために、パウロはいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、最善を尽くしていたのです。もし良心を保たずに、努力しないでいたら、神にも責められ、他人からも責められるでしょう。そして、自分が持っている信仰そのものまで、非難されてしまいます。だからパウロは、主イエスに対する信仰自体が他人から非難されることがないように、正しく生きようと、最善を尽くして努めていたのです。私たちがもし、主イエスを信じていても、良心を保たず、正しく生きていなかったら、他の人、特に未信者たちはどう思うのでしょうか？「あの人たちは、クリスチャンだと言いながら、あんなことをしているのか。あんなふうだったら、キリスト教なんて信じないほうがいい」と言われてしまうでしょう。そんなことにならないように、私たちは、神の前にも人の前にも最善を尽くして生きなければなりません。もちろん、完璧な人間は誰もいません。でも少なくとも、他人から責められることがないように、いつも努力することはできます。それが信仰者の態度です。神の前に良心を保つときに、外側の行いも正しくされていくのです。私たちはこのような主にある良心を維持するように、最善を尽くしましょう。

2、総督フェリクスは、この道について詳しく知り、信仰について関心を持っていましたか？

（使 24:22）

（使 24:24）

（解説）フェリクスは、この道、つまりイエス・キリストに対する信仰の道について、かなり詳しく知っていました。そして、後でユダヤ人である妻と一緒にやって来て、この信仰についてパウロから話を聞きました。そのくらい、この信仰について関心を持っていたのです。しかし、頭で詳しい知識を持っていて、関心を持って聞いていても、それで信仰を持ったことにはなりません。キリスト教についていくら詳しく知っていても、実行していなければ、何の意味もありません。しかし実際には、そのような人が沢山いるのです。信仰の道は、自分自身が決心して従順するように歩み始めたときに、初めて「信仰に入った」と言えるのです。もちろんキリストについて知ること、関心を持つことは大切です。しかし、それにとどまっていはいけません。その次には、このキリストに従うのかどうか、決心が迫られます。この「信じて従います」という第一歩を踏み出すとき、私たちの人生は主によって変えられるのです。

3、フェリクスは、何の話を聞いたとき、恐ろしくなって、パウロと話すのをやめましたか？

（使 24:25）

(解説) パウロが正義と節制と来たるべきさばきについて論じたとき、フェリクスは恐ろしくなって、パウロと話すのをやめて、帰らせました。彼はキリストによる救いの知識は持っていました。しかし、正義に従って、自分の欲望を節制することは望みませんでした。なので、主イエスが再臨して世を審判することを聞いたとき、自分はさばかれて地獄に行くと思って恐れたのです。彼は自分の耳に心地よい教えるを聞くのは好きでしたが、耳の痛い話は聞きたくありませんでした。それで、みことばを聞くのをやめてしまったのです。しかし、このような態度では、正しい信仰を持つことはできません。私たちは聖書のみことばを聞くときに、自分に都合の良い一部分だけを受け入れるのではなく、聖書全体のメッセージをそのまま正しく、神のことばとして受け入れましょう。

4、 フェリクスは、どのような心があったので、パウロを呼び出して語り合いましたか？

(使 24:26)

(解説) フェリクスは、パウロから金をもらいたい下心があったので、何度もパウロを呼び出しました。信仰のことを聞くふりをして、実はお金のほうに関心があったのです。パウロと語り合うのは、信仰を持つとしようとするためではなく、お金を得ることが目的でした。彼は信仰を、お金を得る手段だと思っていたのです。彼にとっては、信仰よりもお金が優先でした。今日でも、このような目的で教会に来る人がたくさんいます。ある人たちは「キリスト教を信じればお金が儲かるか。何か運が良くなるか。教会に行けば何がもらえるか」といった目的で、教会に来て、聖書のお話を聞きます。信者の中でさえ、そのような人がいるのです。直接そのようには口にしなくても「下心」があるのです。しかし、信仰の目的は、お金ではなく、神ご自身です。神に出会って、神を信じて、神に従って生きること、それだけです。神に従って正しく生きていく結果として、経済的必要が満たされていくことはあるかもしれませんが、それ自体が目的ではありません。私たちはこの目的と結果を、逆にしてはいけません。

5、 フェリクスはなぜ、パウロを監禁したままにしておきましたか？

(使 24:27)

(解説) フェリクスはユダヤ人たちの機嫌を取ろうとして、パウロを監禁したままにしておきました。彼の心の中では「パウロを釈放したら、彼を訴えたユダヤ人たちが怒るだろう。でも彼を監禁しておけば、ユダヤ人たちは自分のことを良く思ってくれるだろう」という計算が働いていたのでしょう。彼の人生の判断基準は「周りの人がどう思うか」でした。他人の評価をいつも気にして、人から嫌われないように、好かれるようにすること、それが第一だったのです。彼にとって「神がどう思うか」は、二の次だったのです。だから結局、2年過ぎても、信仰を持つには至りませんでした。私たちも、周りの目をいつも気にしてばかりいては、いつまでたっても信仰を決心できません。信じた後でも、神よりも人の事ばかり見ていては、信仰は成長しません。信仰とは、神を見上げることです。「周りの人がどうであろうと、自分は主に従う」と決心して行動するときこそ、主に祝福され、信仰が成熟していくのです。

6、 フェリクスは信仰について知識も関心もあったのに、主を信じるに至らなかったのは、なぜでしょうか？

(解説) フェリクスは、キリスト教について、かなり詳しく知っていました。妻もユダヤ人で、キリストに対する信仰について関心を持ち、一緒に話を聞きにも行きました。しかし、2年過ぎて、結局主を信じるには至りませんでした。なぜでしょう？彼は正義と節制を持って正しく生きようとしませんでした。最後の審判についての教えを恐ろしく思って、みことば全体を聞こうとしませんでした。信仰よりも、お金を得ることが優先でした。神よりも他人の機嫌を取ることが大事でした。それらのことが、信仰を持つのに妨害になったのです。せっかく信仰について詳しく知っていて関心もあったのに、罪ある生活、恐怖心、お金、他人などがじゃまになって、信仰の決心をすることができなかったのです。私たちにも、このようなことがあります。こういったものは、信仰の成長も妨害します。私たちは、神にもっと近づこうとするのに妨害となるものを、よく注意して取り除かなければならないのです。

7、 あなたの信仰を妨害するものは何ですか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

25章 私のようになることを願う (使徒 25, 26 章)

1、 ユダヤ人たちはなぜ、パウロをエルサレムに呼び寄せてほしいと懇願しましたか？

(使 25:3)

(解説) ユダヤ人たちは、パウロをエルサレムに呼び寄せてほしいと、フェストゥスに懇願しました。しかしそれは、裁判をするためではなく、待ち伏せして、途中でパウロを殺すためでした。人が何かをお願いしても、それが本当の願いではなく、その裏の願い、隠された意図がある場合があります。それを見分けなければなりません。それが分からないうちは、簡単に許可してはいけません。そうでないと、後で大変なことになります。人間の心の願いとは、奥が深いものです。では、それをどうやって知るのでしょうか？それは、神だけがご存知です。まず神に祈って、御声を聞き、知恵を求めて下さい。そして、その本人にも、なぜそう願うのか、色々な角度から質問してみて下さい。そして時間を置いて、その人の反応を見て下さい。そうするうちに、その人がなぜそんなことを願うのか、その本当の意図が明らかになって来

ます。

2、パウロがカエサルに上訴したことによって、パウロはどこに行くことになりましたか？

(使 25:11, 12)

(解説) パウロがカエサル(ローマ皇帝)に上訴したので、フェストゥスはパウロをカエサルのもと、つまりローマに送ることにしました。このようにして、パウロはローマに行く道が開かれたのです。パウロがローマに行って主を証しすることは、主の以前からのご計画でした。主はそれをパウロに示していたので、彼もそれを知っていたし、祈り願っていました。しかし、それがいつ、どんな方法で行くのかは、ずっと分かりませんでした。まさかこんな形で実現するとは、夢にも思っていなかったでしょう！主は私たちの願いをご存知です。しかし、それをそのままかなえて下さるではありません。私たちの願うところをはるかに超えて、もっとすばらしい時と方法で、主の御心をかなえて下さるのです。その主の御心になるように、委ねつつ期待して祈りましょう。

3、十二部族が得たいと望んでいる「約束のもの」とは何ですか？

(使 26:6-8)

(解説) 神はユダヤ人の父祖たちに、約束を与えました。それは「神を信じて神に仕える民は、復活して神の国を相続する」という約束です。なので十二部族、つまりユダヤ人、イスラエル人たちは、この「約束のもの」である死者の復活を信じて、それを得たいという望みを抱いて来ました。では、その約束のものは、どのようにして得られるのでしょうか？それは、イエス・キリストによって得られるのです。約束の救い主イエス・キリストを信じる者は、死んでも復活して、神の国を相続するのです。ユダヤ人たちは、それをずっと願って来たのに、その約束を実現させるお方が主イエスであることを悟らないで、イエスを否定しました。彼らは夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束の復活を得たいと待ち望んで来たのに、その時が来ても知らずに拒否してしまうとは、何ともったいないことでしょう。・・・私たちも、自分がずっと願って祈り求めて来たのに、いざそれが目の前に来ても、それがそれとは知らないで、見過ごしてしまうことがあります。祈りの答えは、たいてい意外な形でやって来るのです。その神の下さった答えを「自分の願ったものとは違う」と言って拒否してはいけません。神の下さるものは、全て良いものなのです。たとえそれが願った形ではなかったとしても、それを信仰によって受け入れて下さい。神はあなたに、約束のものをちゃんと与えて下さっているのです。

4、「とげのついた棒をけるのは、あなたには痛い」とは、どういう意味ですか？

(使 26:14)

(解説) とげのついた棒をけったら、自分がとげにささって痛いだけです。何も得なことはありません。

それと同じように、主イエスを迫害しても損をするのは自分だけだ、それなのになぜ主を迫害するのか、と主は言いたかったのです。パウロはそうとは知らずに、主イエスを信じる者たちを迫害し、牢に入れました。パウロは、自分が迫害しているのが主なる神の御子であることを、知らなかったのです。神に反抗して戦っても、勝ち目はありません。自分が損をして、痛い目に遭うだけです。主の前に早く降伏して、主を自分の主人として受け入れ、従うのが良いのです。私たちも時々、主の御心に抵抗して、自分の肉の願いを押し通そうとすることがよくあります。しかし、それでうまくいくことはほとんどありません。もっと大変になって、自分が苦しむだけです。そんなときは、この言葉を思い出して下さい。とげのついた棒をけるのは、あなたには痛いのです。自分が今、その主の棒を一生懸命けっているのではないか、よく考えて下さい。早く気が付いて、それをやめましょう。そして主の御心に従いましょう。それが解決への早道です。

5、主がパウロを遣わす目的は何ですか？

(使 26:17, 18)

(解説) 主がパウロをユダヤ人と異邦人のところに遣わす目的は、

- (1) 彼らの目を開くため。
- (2) 彼らを闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせるため。
- (3) 主イエスを信じる信仰によって罪の赦しを得させるため。
- (4) 聖なるものとされた人々と共に、相続にあずからせるため。

・・・でした。これこそが、私たちが救われて、未信者たちに派遣される目的です。この宣教目的のために、私たちは主の奉仕者、証人として任命されたのです。未信者たち、失われたたましいたちは、霊の目が閉ざされています。彼らは闇の中、サタンの支配の中にいます。自分の罪のゆえに、地獄に行くしかない人々なのです。しかしあなたが彼らの所に派遣されて、この福音を伝えるなら、彼らはどうなるでしょうか？彼らは目が開き、神の光のもとに立ち返り、罪が赦され、聖徒として天国を相続するのです！何という大きな変化でしょう。そしてこの務めは、何という大きな任務でしょう！私たちは、このような重要な任務を主から任されているのです。この神の宣教目的を、自分の人生の最大の願いとしましょう。そうするときに、神の願いがあなたを通して実現します。

6、パウロが「真実で理にかなったことば」を話しても、なぜ「頭がおかしくなっている」と言われますか？

(使 26:24, 25)

(解説) パウロはイエス・キリストの福音と、自分の救いの証しを、真実で理にかなった言葉として話しました。しかしフェストゥスはそれを聞いても「彼は頭がおかしい、気が狂っている」としか思えません。私たちが伝道して証しするとき、未信者たちはきっとこんなことを言うでしょう。「あれは頭がおかしくなった。」あなたが宣教者として遠い国へ行くときに、もしかしたら、自分の家族や教会の仲間

からさえも、このように言われるかもしれません。「博学が気を狂わせているんだ。」しかし、私たちは本当に間違いですか？頭がおかしいのでしょうか？いいえ、そんなことはありません。私たちは、真実で理にかなった言葉を話しているのです。主の福音のみことばは、いつも真実です。理にかなっています。私たちはそれを、ただそのまま伝えているだけです。宣教のために献身するとき、たとえ周りの反対にあっても、がっかりしないで下さい。彼らは霊の耳が閉ざされているので、あなたの言葉を理解できないのは当然なのです。どうかあきらめずに、みことばを宣言し続けて下さい。あなたが真実を語っていることを、主はご存知です。

7、この状況を通して、パウロが神に願うことは何ですか？

(使 26:27-29)

(解説) パウロが神に願っていることは「みな私のようになってくれること」でした。つまり「自分のようにキリスト者になってほしい」という意味です。そのために、アグリッパ王だけでなく、一緒にいてパウロの話しを聞いている人々もみんな信じてほしいと願って、わずかな時間でも使って、主を証したのです。パウロは自分が鎖につながれていても、人々が自分のようになってほしいと思いました。「自分はキリストにあって自由人だ」ということを、良く知っていたからです。体は鎖で縛られていても、たましいは縛ることができません。彼の願いは、自分が鉄の鎖から解放されることよりも、人々が罪と死とサタンの鎖から解放されることでした。だから全ての人々に「自分のように主イエスを信じてキリスト者になってほしい」と大胆に言えたのです。パウロの願いはいつもただ一つ、人々が主を信じて救われること、それだけでした。たとい自分がどんな大変な状況の中にあつたとしても、その状況を通して主を証しすることができれば、それが彼にとってはもっと良いのです。自分が苦しみから脱出することよりも、この苦しみの中で主の栄光が証しされ、人々が主を信じるようになること、それを願ったのです。・・・あなたは問題にぶつかったとき、何を願いますか？その問題から脱出することだけを願いますか？それとも、その問題を通して主の栄光が現されることを願いますか？私たちは、何か問題が起きたとき、その問題のただ中で主のみわざが現され、むしろ主を証しする機会となるように祈りましょう。どんな大変な状況、鎖で縛られているような中にあつても、変わらない主のすばらしさを証ししましょう。そのとき人々はあなたを見て「私もあなたのようにになりたい」と言うようになるでしょう。

8、大変な状況にあるとき、あなたが神に願うことは何ですか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

26章 嵐の中で宣言しなさい（使徒27章）

1、百人隊長はなぜ、パウロの言うことよりも船長や船主のほうを信用しましたか？

（使 27:9-12）

（解説）パウロは人々に、この航海は危害と大きな損失をもたらすと警告しました。しかし、百人隊長はパウロの言うことよりも、航海の専門家である船長や船主のほうを信用しました。そして多数の者たちの意見により、ここから船出してフェニクスで冬を過ごそうということになりました。百人隊長は、専門的な知識と経験がある人の意見、多くの者たちの意見が、もっと正しいと判断したのです。パウロは神に示されて、神からのメッセージを伝えたのですが、百人隊長はそれを受け入れませんでした。「パウロは航海のことなんて分からない凡人なのに、一体何を言うんだ」と思ったのでしょう。しかしその結果、彼だけでなく船に乗っている者全員が、後で大変危険な目に遭うことになったのです。専門家の意見、多数決で決めた意見が、いつも正しいとは限りません。人間は、間違えることもあり得るのです。神だけが、本当に正しい道をご存知です。私たちは、偉い人の言うことや周囲の意見に流されるのではなく、神の御心を知るように努めなければなりません。いつも自分から神の御声に耳を傾けて「この状況の中で神は私に何を望んでおられるのか」を聞き取るようにしましょう。

2、人々は状況を見て、思い通りになったと考えて出発しましたが、それでうまくいきましたか？

（使 27:13-15）

（解説）穏やかな南風が吹いて来たので、人々は思い通りになったと考えて出航しました。ところが、間もなく暴風が吹き降ろして来て、船はそれに巻き込まれて、風に逆らって進むことができず、流されるままとなってしまいました。状況が変わったのを見て、都合が良くなったと思って出発したのですが、そのせいで逆に嵐に巻き込まれて、それに翻弄されるようになったのです。私たちの人生にも、このようなことがよくあります。状況を見て「今がチャンスだ」と思って始めたのに、もっとうまくいかなくなるのです。状況だけを見て判断していると、いつもそれに巻き込まれて、状況に流されるままになります。状況が良いから、それが必ずしも御心だとは限りません。状況の風に翻弄されるのではなく、主の御心を探り、主の導きにより頼んで、それに従っていくことを習慣にして下さい。自分の目と耳で行くべき道を確認して、主の下さる知恵によってよく考えながら、最終的には信仰をもって判断していくようにしましょう。

3、何も見えない日は何日も続き、暴風が激しく吹き荒れたので、人々はどう思いましたか？

（使 27:20）

(解説) 太陽も星も見えない日が何日も続き、暴風が激しく吹き荒れたので、人々は自分が助かる望みも今や完全に絶たれようとしていると思いました。では本当に彼らは、助かる望みが「完全に」絶たれたのでしょうか？いいえ、そんなことはありません。そのような絶望的な状況の中でも、必ずどこかに希望があります。1%でも可能性が残っているならば、私たちは最後まで希望を捨ててはいけません。人生の嵐の中で、苦しみと悩みと問題の暴風に巻き込まれて翻弄されているときに、あなたは どうしますか？絶望して全てをやめてしまいますか？それとも生きる望みを捨てないで、わずかな希望を握って、その場を耐え忍びますか？希望というものは、全能の主を絶対的に信頼する信仰から生まれて来るのです。あなたの心の中に少しでも「主にある希望」が残っているならば、そこから状況が切り開かれていきます。

4、パウロはこの状況の中で、何を信じて宣言しましたか？

(使 27:22-26)

(解説) 長い間、誰も食べないで絶望している人々に対して、パウロは次のように言いました。「元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う人は一人もありません。私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」パウロはどうしてこのようにはっきり言い切ることができたのでしょうか？それは、神からの啓示があったからです。夜に神の御使いが彼のそばに立って「恐れるな。あなたは必ずカエサルの前に立つ。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられる」と言いました。パウロは神を信頼しました。そしてその神のみことばの約束を堅く握り、神が自分に語られたことは、必ずその通りになると信じました。そしてそれを心の中で思っているだけではなく、その言葉を口に出して、みんなの前で「宣言」したのです。信仰の宣言には、力があります。信じる者は、その信じる通りに語ります。私たちが神から与えられたみことばを口に出して告白するときに、それはそのままその通りになります。神の力は、あなたの口から出て来るのです！苦しい状況にあるとき、難しい大変な問題にぶつかっているとき、あなたはどんな言葉を口にしますか？「もうだめだ。しょうがない。どうしようもない。やめたい。できっこない。もう分からない。自分には何もない。どうせうまくいかない・・・。」そのように言ったら、本当にその通りになってしまいます。しかし、もしこう宣言したら、どうでしょう。「いや、何とかなる。やればできる。やってみよう。必ず道はある。主にできないことは何一つない。主の力によって、私は何でもできる！！」あなたが信仰によって、嵐に向かってそう宣言するなら、嵐は静まるのです。信じますか？あなたの信仰の通りになりますように。

5、百人隊長や兵士たち、船にいた一同 276 人は、誰の言うことを聞くようになりましたか？

(使 27:30-37)

(解説) 水夫たちが船から小舟で逃げ出そうとしていたとき、パウロは百人隊長や兵士たちに「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助かりません」と言いました。そこで兵士たちは小舟の綱を切って、それが流れるままにして、水夫たちが逃げられないようにしました。またパウロは船にいる一同に「今日まで 14 日間、あなたがたは何も食べませんでした、食事をするように勧めます。これで、

あなたがたは助かります。」と言って、パンを取り、一同の前で感謝の祈りをささげてから、それを食べ始めました。それで皆も元気づけられ、食事をしました。以前、百人隊長や船員たちは、パウロの言うことを聞きませんでした。でもそれによって大変な目に遭ってから、彼の言ったことが正しかったと知りました。そして彼が神からのメッセージを宣言したとき、皆は彼が「神の人」だと認めました。その後からは、皆のパウロに対する態度が変わりました。パウロが言うことに、すぐにそのまま従うようになったのです。パウロが、水夫たちを逃がさないように言うと、兵士たちはその通りにしました。パウロが一堂に食事するように勧めると、皆は食事をしました。パウロが一同の前で「聖餐式」をして、神に祈り、励ますと、皆は元気づけられました。以前はただの一囚人だったパウロは、今や船にいる一同 276 人の「霊的指導者」となったのです！私たちが今いる所でも、同じことが起こります。あなたが今いる学校、職場、家族、親戚、近所、地域の中で、あなたが彼らのためにとりなし祈り、その場で礼拝をささげ、人々にみことばを宣言するときに、周りの人々は、未信者であっても、あなたを神の人と認めるようになります。あなたが今どんな社会的地位にいるかは関係ありません。神はあなたを、そのグループの「霊的指導者」として任命したのです。あなたがそこに存在することによって、その共同体が変えられます。あなたのいる現場が、神の御国となるのです！あなたはそのために、今いる所に神から「派遣」されたのです。神があなたを通して、あなたの学校、職場、家族、地域に「霊的変革」を起こして下さいように。

6、パウロが言ったことは、最終的にその通りになりましたか？

(使 27:22)

(使 27:26)

(使 27:42-44)

(解説) パウロは「失われるのは船だけで、いのちを失う人は一人もいない。必ずどこかの島に打ち上げられる」と預言しました。そして実際、船は座礁して壊れましたが、全員が無事に陸に上がりました。兵士たちは、囚人たちが逃げないように殺そうと図りましたが、百人隊長はパウロを助けたいと思って、その計画を制止しました。最終的に、パウロが預言した通りに、そのまま成就したのです。神からの預言は、必ず成就します。それによって、神が生きておられることを示し、神の栄光を現すためです。私たちは、生活の色々な場面で、神のみことばを信仰によって宣言するとき、そのみことばは現実となります。あなたの宣教の現場で、未信者たちの前で、あなたの直面している問題に対して、人々の病気や祈祷課題に対して、神からのメッセージを、口に出して大胆に宣言して下さい。あなたの信仰の告白が、あなたもあなたの周りの人々も救うのです。

7、人生の嵐のような状況の中で、あなたはどのように宣言しますか？

(解説) 最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

27章 今いる所で宣教しなさい（使徒28章）

1、まむしにかみつかれたとき、パウロはそれをどうしましたか？

（使 28:3-6）

（マルコ 16:18）その手で蛇をつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば癒されます。

（解説）パウロはまむしにかみつされましたが、彼はそれを火の中に振り落として、何の害も受けませんでした。人々は、彼が急に倒れて死ぬだろうと思って見ていたけど、いくら待っても彼が何ともないので、「この人は神様だ」と言い出しました。これは、マルコ 16:18 で約束されていたことの成就でした。神がパウロを守って、蛇の毒から害を受けないようにして下さったのです。パウロはその蛇を手から振り落として、何ともありませんでした。・・・私たちが宣教するときにも、色々が危険や妨害が襲ってることがあります。たとえそれが起きても、神は私たちが害を受けないように守って下さるのです。では、私たちはそのような事件や問題が起きたとき、どうしたら良いのでしょうか？それを自分の手から振り落として、何とも思わなければ良いのです。事件や問題は、それらをいちいち悩んで考え込むから「毒」となるのです。「こんなことは大したことではない」と思って、自分の頭の中から振り落としてしまえば、実際に何ともなく、毒も害も受けません。問題は受け手によって、害とも益ともなるのです。信じますか？私たちは、日々自分に降りかかってくる事件や問題によっていちいちしぼられるのではなく、それを自分の手から振り落として、害を受けないようにしましょう。

2、パウロが癒しの祈りをしたら、島の人々はパウロたちにどのようにしてくれましたか？

（使 28:8-10）

（解説）パウロは、マルタ島の長官の父が発熱と下痢で苦しんでいたもので、行って手を置いて祈り、癒しました。島の他の病人たちもやって来て、癒しを受けました。それから、島の人々はパウロたちに深い尊敬を表し、船出するときには必要な物を用意してくれました。私たちが宣教地で未信者たちのために手を置いて祈るとき、神は奇跡を起こして下さいます。病気は癒され、悪霊は追い出されます。家庭が回復し、必要が満たされ、問題は解決されます。それを見て、未信者たちはイエス様を信じるようになります。それだけではなく、彼らは宣教者たちを神の人と思って尊敬し、感謝の意を表して、贈り物までしてくれます。私たちはもっと積極的に、癒しのために祈りましょう。その病人の所に直接行って、実際に手を置いて祈り、癒しを宣言しましょう。神が私たちの祈りに応えて、奇跡を起こして下さいることを期待しましょう。

3、兄弟たちがどうしたとき、パウロは勇気づけられましたか？

(使 28:14, 15)

(解説) パウロはマルタ島を出航して、プテリオという町に着きました。その町で、キリストを信じる兄弟たちを見つけました。パウロは彼らに勧められて、彼らの所に7日間滞在しました。その後ローマに行ったら、パウロたちが来るという知らせを聞いたローマ教会の兄弟たちが、わざわざ迎えに来てくれました。パウロは彼らに会って神に感謝し、勇気づけられたのでした。パウロは今まで色々大変でした。暴動に遭い、捕らえられ、裁判にかけられ、陰謀で殺されそうになり、船に乗ったら嵐に遭いました。そんなことがあった後で、教会の主にある兄弟たちが迎えに来て歓迎してくれたら、どんなに感激し、喜び、慰められ、励まされたことでしょうか。このような信仰の仲間たちが各地にいたから、パウロは宣教を続けることができたのです。私たちの教会は、宣教者たちのために何ができるでしょうか？彼らを歓迎し、家に滞在するように勧めることができます。彼らが来るという知らせを聞いたら、行って迎えに行き、再会を喜び、彼らの話を聞いてあげることができます。そして「私たちはあなたをいつでも応援します。何か必要なことがあったら、何でも言って下さい」と言うのです。そうするときに、宣教者たちは感激して涙を流すことでしょうか。そして彼らは主に感謝をささげ、勇気づけられて、再び宣教の旅を続けることができるようになります。今いる所で宣教者たちを支えて助けることも、立派な宣教活動なのです。

4、至る所で反対があるとき、ユダヤ人たちはパウロに対してどうしましたか？

(使 28:22)

(解説) パウロがローマに入って3日後、彼はユダヤ人のおもだった人たちを呼び集めて、自分がここまで来た事情を話しました。彼らはそれを聞いて「この宗派については至る所で反対があると耳にしているから、あなたが考えていることを、あなたから直接聞くのが良いと思っている」と言いました。これこそが、うわさに対する正しい態度です。未信者たちはだいたい、キリスト教について「うわさ」しか知りません。「あの人がキリスト教についてこう言っていた。あの人がクリスチャンになって家が大変だったそう。以前本で少し読んだことがある。教会ではこんなことをしているらしい」などなど……。しかし、多くの人が至る所で反対しているとしても、それが本当に間違っているとは限りません。それが事実かどうかは、その当事者から直接、自分の耳で聞いてみないと、分からないのです。キリストのことを知るには、キリストを信じて変えられた人から直接聞くのが一番良いです。そしてキリストのみことば、聖書を直接読むのです。そうするときに「この宗派」がどんな教えなのか、良いのか悪いのか、自分で判断できるのです。

5、パウロはローマでまる2年間、どのように宣教できましたか？

(使 28:30, 31)

(解説) パウロはローマで、監視の兵士が付いてはいましたが、一人で生活することを許可されました。それで、自費で借りた家に住んで、訪ねて来る人たちをみな迎えました。その家の中で、少しもはばかり

ことも、妨げられることもなく、自由に神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えることができました。パウロは囚人の身で、色々な制限があり、宣教旅行にも行けませんでした。今いる所で自由に宣教できました。ローマ帝国の首都、中心地のローマで、今の自分の立場を用いながら、効果的に伝道しました。そしてユダヤ人だけでなく異邦人、兵士たち、政府高官やカエサル（皇帝）にまで、主イエスのことを証しすることができたのです。・・・私たちが今いる所は、どうでしょうか？宣教をするのに、色々な制約や妨害がありますか？では、そのような制限の中でも、今いる環境の中でできることは何でしょうか？たとえ限界のある状況の中でも、今しかできない「何か」があるはずです。心の中で決心さえすれば、あなたが宣教するのを妨げるものは何もありません。私たちは、たとえ今遠い宣教地に行けなくても、今ここでできることがあります。宣教地のために祈ること、宣教者のために支援すること、未信者を家に招いて証しすること、教会の仲間たちと毎週家で集まって聖書を学ぶこと、世界宣教について本やインターネットで研究すること、職場の休憩室で祈り会を始めること・・・・・・。「千里の道も一歩から」です。宣教をビジョンとする人は、まず今自分がいる家庭、職場、学校、地域から始めて下さい。その小さな一歩が、やがて地の果てにまで続いていくのです。

6、あなたは今自分がいる所で、どのように宣教しますか？

（解説）最後の質問は「まとめと適用」の質問です。今日学んだ内容の全体を振り返りながら、参加者全員が一人ずつ発言して、自分の生活に具体的に適用して、実際に決心できるように導いて下さい。

28章 あなたによる使徒 29章

- 1、「使徒の働き」を学んで、あなたが一番印象に残った聖句は何ですか？

- 2、一番励まされたことは何ですか？

- 3、具体的に決心したことは何ですか？

- 4、あなたの周りにいる未信者で、特に伝道したいと思う人の名前を5人書いて下さい。
 - (1)
 - (2)
 - (3)
 - (4)
 - (5)

- 5、その5人のために、どのように伝道するか、具体的な計画を書いて下さい。

- 6、あなたの宣教のビジョンは何ですか？

- 7、あなたを通して神の宣教ビジョンが実現するように、一緒に祈りましょう。